

GOZAWA ISEKI

# 御沢遺跡

上伊那圏域広域的水道整備計画  
箕輪町上水道福与配水池建設に伴う  
郷沢遺跡の緊急発掘調査報告書

1992年

箕輪町教育委員会

GOZAWA ISEKI

# 御沢遺跡

上伊那圏域広域的水道整備計画  
箕輪町上水道福与配水池建設に伴う  
郷沢遺跡の緊急発掘調査報告書

1992年

箕輪町教育委員会

# 序

箕輪町教育委員会

教育長 堀 口 泉

昭和60年に工事が開始されました箕輪ダムも建設工事が終了し、平成3年10月からは湛水が始められました。また平成4年10月の用水供給開始を目指して、長田地籍に浄水場が建設されつつあります。

当郷沢遺跡は、この浄水場からの配水をためて福与地区、三日町地区、長岡十沢地区、木下南部地区に給水される上水道配水池工事に先立って、発掘調査を実施し記録保存を行うことになりました。

箕輪町の南東に位置する三日町、福与地区は、背後から流れ出す中小河川によって形成された小扇状地や舌状台地が多く、以前より土器や石器が出土する遺跡密集地帯であり、なかでも大原遺跡群は町内における最大級の遺跡地帯であります。今回調査を行なった郷沢遺跡はこの大原遺跡群の東端に位置しています。

4月より約2ヶ月間にわたる調査の結果は、縄文、古墳、中世の各時代の遺構と遺物が確認されています。本書が、祖先が残した文化財を保護し、地域の歴史を研究するための一助となれば幸いと存じます。

報告書刊行にあたり、発掘調査に深いご理解をいただきました福与区をはじめとする諸機関並びに地域住民の方々、また、直接調査に参加御協力下さいました団員の皆様に心より感謝申し上げます。

## 例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字福与 656 番地 2、4 に所在する郷沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、箕輪町教育委員会が行なったものである。調査は、平成 3 年 4 月 3 日から 5 月 29 日まで実施し、引き継ぎ整理作業及び報告書の執筆作業を行なった。
3. 本書を作成するに当たって、作業分担を以下の通り行なった。
  - ・土器の接合・復元—福沢幸一
  - ・遺構図の整理作業・トレースー赤松 茂、根橋とし子、宮脇陽子
  - ・遺物の実測・トレースー赤松 茂、根橋とし子、宮脇陽子
  - ・遺物拓影—宮脇陽子
  - ・挿図作成—赤松 茂、根橋とし子、宮脇陽子
  - ・写真撮影・図版作成—赤松 茂、根橋とし子
4. 遺構図は、次の縮尺に統一した。  
住居址—1：60、土坑—1：40、溝址—1：100
5. 遺物実測図、土器拓影図は、次の縮尺に統一した。  
縄文土器・土師器・須恵器・陶器・金属器—1：2、1：4、縄文土器・須恵器・土師器拓影図—1：3、石器—2：3、1：3
6. 土器実測図及び土器拓影図の断面は、粘土帶の接合状況が観察できるもののみ断面に表示した。また、土器実測図、拓影図の断面のスクリーントーンによる表示は、須恵器・陶器を表わす。
7. 本書の執筆は、赤松 茂、根橋とし子、宮脇陽子が行なった。
8. 本書の編集は、赤松 茂、柴登巳夫、根橋とし子、堤口彦雄、福沢幸一、宮脇陽子が行なった。
9. 本調査及び報告書の作成に当たって、下記の機関に御指導・御協力いただいた。記して感謝申し上げる。  
福与区、(財)長野県埋蔵文化財センター、辰野町教育委員会、伊那市教育委員会
10. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。

# 本文目次

題　字	團　長　樋口彦雄
序	教育長　堀口　泉
例　言	
本文目次	
挿図目次	
表　目　次	
図版目次	
第Ⅰ章　遺跡の立地.....	1
第1節　位　置.....	1
第2節　自然環境.....	2
第3節　歴史環境.....	3
第Ⅱ章　発掘調査の経過.....	5
第1節　調査に至る経過.....	5
第2節　調査団の編成.....	5
第3節　調査日誌.....	6
第Ⅲ章　遺跡の状態.....	9
第1節　調査方法と結果概要.....	9
第2節　層　序.....	10
第Ⅳ章　遺構と遺物.....	13
第1節　住居址.....	13
1, 1号住居址.....	13
2, 2号住居址.....	20
第2節　土　坑.....	28
第3節　溝状遺構.....	33
第Ⅴ章　まとめ.....	38

## 挿図目次

第1図 調査位置図	1	第10図 2号住居址出土遺物実測図1	25
第2図 周辺遺跡分布図	4	第11図 2号住居址出土遺物実測図2	26
第3図 調査区設定図・調査範囲図	9	第12図 2号住居址出土遺物実測図3	27
第4図 土層図	10	第13図 2号住居址出土遺物実測図4	28
第5図 全体図	11・12	第14図 土坑実測図	31
第6図 1号住居址実測図掘り方実測図 ・遺物出土状況図	15・16	第15図 土坑出土遺物実測図	32
第7図 1号住居址出土遺物実測図1	18	第16図 溝状遺構実測図	35・36
第8図 1号住居址出土遺物実測図2	19	第17図 溝状遺構出土遺物実測図	37
第9図 2号住居址実測図・遺物出土状況図	21・22		

## 表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	3	第6表 土坑一覧表	29
第2表 1号住居址出土土器観察表	14	第7表 土坑出土土器観察表	30
第3表 1号住居址出土石器観察表	17	第8表 土坑出土石器観察表	30
第4表 2号住居址出土土器観察表	23	第9表 溝状遺構出土土器観察表	33
第5表 2号住居址出土石器観察表	24	第10表 溝状遺構出土石器観察表	34

## 図版目次

図版1 調査地遠景(南東より)、調査地近景(南方より)	図版9 10号土坑、2号住居址周辺土坑群
図版2 調査地全景(南方より)、土層断面	図版10 溝状遺構、溝状遺構土層断面
図版3 1号住居址、1号住居址遺物出土状況	図版11 1号住居址出土土器
図版4 2号住居址、2号住居址遺物出土状況	図版12 2号住居址出土土器1
図版5 2号住居址炉、遺物出土状況、炭化出土状況	図版13 2号住居址出土土器2
図版6 1号土坑、2号土坑、3号土坑	図版14 土坑出土土器、2号住居址・溝状遺構出土石器
図版7 4号土坑、5号土坑、6号土坑	図版15 2号住居址・溝状遺構出土石器、2号住居址・土坑出土石器
図版8 7号土坑、8号土坑、9号土坑	図版16 1号住居址出土石器、調査団員

# 第Ⅰ章 遺跡の立地

## 第1節 位 置

郷沢遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字福与 656番地2、4に、北緯 $35^{\circ}53'05''$ 、東經 $138^{\circ}00'30''$ の地点で標高約760mに位置する。天童川左岸段丘上の福与区は、東方の伊那山地の不動ヶ峰南西麓より流れる判ノ木沢川によって形成された扇状地の北方に位置する。ここは、眺望もよく南に仙丈岳、北には守屋山を望むことができる。また、眼下に広がる水田地帯も展望できる。



第1図 調査位置図

## 第2節 自然環境

笑輪町は、西に木曾山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中心を東西を二分するように南流している。その両岸は河岸段丘と数多い扇状地とが独特の地形を作り出している。東方の山麓から流れ出る判ノ木沢川によって形成された小扇状地の一部に福与区はある。扇状地における地質構造は、ローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂の層で構成されている。天竜川はその末端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を作り上げている。段丘の突端部は、天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい東側に面する緩やかな傾斜地である。段丘下には、扇頂部や扇央部より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜礫層と沖積層の境に湧き出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利と合わせ、豊かな水源となっている。また、段丘崖下には、天竜川の氾濫原がみられ、北から南に向かってその幅は広がっている。

遺跡は、扇状地の扇頂部にみられる、山麓より尾根状に西方に伸びる舌状台地上に所在する遺跡群の一つである。また、台地に隣接する小河川は格好の水源となり、西へ緩やかに傾く斜面は日当りがよく日照時間も長い。この様に、恵まれた自然環境の中に郷沢遺跡は存在しているといえよう。



遺跡周辺航空写真

1:8,000

### 第3節 歴史環境

天竜川左岸段丘上一帯は竜東地区と呼ばれ、ここには福与区、三日町区が東部の一単位として存在している。地形は天竜川沿岸水田地帯から小段丘や扇状地を経て伊那丘陵になっている。この竜東地区的遺跡の分布状況は、沢川の扇状地である長岡・南小河内地籍にみられる遺跡群と、判ノ木沢川の扇状地である、三日町・福与地籍にみられる遺跡群とに分けられる。郷沢遺跡は後者の遺跡である。後者の代表的な遺跡は、北より澄心寺下、御射山、上金、大原の各遺跡で発掘調査が行なわれ、縄文時代早期から平安時代の複合遺跡であることが確認されている。これら多くの遺跡を保護していく上でも、今後この一帯における開発には、十分な注意を図つていく必要がある。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地籍	立地	時代					備考
				旧石	縄文	弥生	古墳	平安	
1	郷沢	福与	台地	○		○		○	今回調査
2	福与城址	福与	扇央	○				○	県史跡
3	判ノ木	福与	扇央	○					
4	二本松	福与	段丘	○					
5	狐垣外	福与	台地	○	○		○		
6	石仏	福与	扇頂	○			○		
7	上頬沢	福与	扇央	○					
8	上の山	福与	扇央	○	○		○		
9	福原	福与	扇央	○	○		○		
10	大原	福与	扇央	○			○		昭和53・54年調査
11	黒津原	福与	段丘	○					
12	矢田尻	福与	段丘	○					
13	上金	福与	段丘	○	○		○		昭和61年調査
14	北垣外	福与	段丘	○	○		○		



- |      |       |      |      |      |
|------|-------|------|------|------|
| ●郷 沢 | ●福与城址 | ●判ノ木 | ●二本松 | ●狐塙外 |
| ●石 仏 | ●上 頼沢 | ●上の山 | ●福 原 | ●大 原 |
| ●黒津原 | ●矢田尻  | ●上 金 | ●北塙外 |      |

第2図 周辺遺跡分布図

## 第Ⅱ章 発掘調査の経過

### 第1節 調査に至る経過

上伊那圏域広域的水道整備計画に基づいて、箕輪町は、比較的小規模な簡易水道・飲料水供給施設によって給水していた地域に上水道を普及し、安定供給に資するため福与郷沢地籍に配水池を建設することになった。事業は、昭和62年より水源開発と広域水道受水を目的として、平成9年度を工期に第4次経営変更認可を得て始められてきており、平成4年10月に配水池の広域受水を目指して進めてきている。これによって給水の範囲は、福与地区・三日町地区・長岡十沢地区・木下南部地区に及び、これら一帯が安定供給されることであろう。

町教育委員会は、この事業主体側に当たる長野県上伊那広域水道用水企業団と町水道課から開発計画の連絡を受けて、建設予定地に所在する埋蔵文化財の保護を目的として平成2年度中より幾度もの協議を重ねてきた。郷沢地区一帯における埋蔵文化財の存在は、町の周知の遺跡としては登録されていなかったが、地形的な立地条件と地城住民からのお話と、一帯の分布調査結果から、周辺地域にみられる遺跡との関連性も含めて、町の重要な遺跡として保護の対象となるとの結論に達した。また、県教育委員会文化課を含めた三者間の再度の協議により、記録保存を目的とした発掘調査を実施するに至った。

調査はこのような経過を踏まえて、町教育委員会が開発側より委託を受けて新たに調査団を結成して、平成3年4月3日より調査を開始する運びとなった。尚、調査開始に当たって地元福与区には、円滑に進められるようご配慮とご協力をいただけることで合意に達した。

### 第2節 調査団の編成

#### 調査団

顧問 丸山敏一郎 長野県立赤穂高校定時制教頭  
団長 樋口 彦雄  
担当者 柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員  
調査主任 赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員  
調査員 福沢 幸一 長野県考古学会員  
調査員 根橋とし子 箕輪町郷土博物館臨時職員  
調査員 宮脇 陽子 箕輪町郷土博物館臨時職員

## 團員

井上武雄、遠藤茂、大槻泰人、岡 章、岡 正、春日義人、唐沢光國、小池久人、  
小嶋久雄、笹川正秋、清水すみ子、戸田隆志、中坪侃一郎、中坪袈裟男、野村金吉、  
伯耆原正、松田貫一、松田幸雄、水田重雄、山内志賀子、山口今朝人

## 事務局

堀口 泉 箕輪町教育委員会教育長

上田 明勇 箕輪町教育委員会社会教育課課長

市川 健二 箕輪町教育委員会社会教育課係長

柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員

石川 寛 箕輪町郷土博物館学芸員

赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員

酒井 峰子 箕輪町郷土博物館臨時職員

根橋とし子 箕輪町郷土博物館臨時職員

宮脇 陽子 箕輪町郷土博物館臨時職員

## 第3節 調査日誌

4月3・4日（水・木）晴 試掘。

4月9日（火）晴 終日重機による表土はぎ作業を行った。

4月10日（水）晴 機材の運搬を行い、作業具を置くテントを設置する。町教委、町水道課を含む発掘調査関係者の列席の中、調査団の結団式を執り行う。トレーナーを4本設定し遺構の確認作業を行い、住居址2軒が出土した。併せて1号、2号と呼称した。みのわ新聞、箕輪毎日新聞、中日新聞、農協有線が取材に来た。

4月12日（金）晴 住居址周辺部を中心に、上面確認を進めた。

4月15日（月）晴 遺構上面確認を行ったが、遺構は確認できなかった。

4月16日（火）晴 遺構上面確認を続けるが、遺構の確認はできなかった。

4月17日（水）晴 遺構上面確認を行い、調査区の西部より溝状遺構を確認した。

4月19日（金）晴 遺構上面確認と並行し、住居址の掘りを始める。調査区の南部より土坑らしき遺構が3基検出された。グリッドの設定を開始した。



4月20日（土）晴 住居址の掘りを行う。  
2号住より炭化材と焼土が全面的に確認され、  
火災住居らしいという推測が成された。

4月22日（月）晴 1、2号住の掘りとベルトの壁削り、1号土坑の掘りを行う。ベンチマークの移動も行った。1号住から、小型器台がほぼ完形で出土した。農協有線が取材に、水道課職員が来た。



4月23日（火）曇 1、2号住の掘りと1号住ベルトの土層断面測量を行った。測量後ベルトをはずす。1号土坑、溝状遺構の掘りも行った。1号住居址から埋甕炉、磨製石斧、2号住から縄文土器2個体、石などが出土した。2号住の周辺部より土坑が数基確認された。町長、県議、福与長寿クラブ、区長の方々が来訪された。

4月25日（木）曇 溝状遺構の掘りと2号住のベルトの土層断面測量、測量後ベルトはずしを行う。箕輪南小学校の6年生が見学に来た。

4月26日（金）晴後曇 2号住のベルトの土層断面測量、及びベルトはずしと溝状遺構の掘り下げを行った。1号住の残部のベルトはずしも行った。

4月30日（火）晴 1号住の周溝の掘りと2号住の掘りと2、6号土坑の断面測量を行った。溝状遺構の排土作業にベルトコンベアを使用する。箕輪南小の3、4年生が見学に、箕輪毎日新聞が取材に来た。

5月1日（水）曇 1、2号住の精査と1号住の写真撮影、土坑の掘りと土層断面測量、溝状遺構の掘りを行った。4号土坑は下部より焼土層や炭化物層が確認された。

5月2日（木）曇後雨 1号住に平面測量のため方眼を設定する。溝状遺構の掘り下げをした。みのわ新聞が取材に来た。

5月7日（火）晴 2号住に平面測量のため方眼を設定する。1号住の遺物の平面測量及び取り上げ、溝状遺構の掘り下げを行った。みのわ新聞、中日新聞が取材に来た。

5月8日（水）曇 1、2号住の遺物の平面測量と取り上げを行った。溝状遺構の掘り下げを行った。

5月10日（金）晴 1号住の遺物の平面測量と取り上げ、2号住の炭化材の平面測量を行う。溝状遺構の掘り下げを行った。

5月13日（月）晴 1号住は土器の取り上げが終了し、床面の精査を行う。2号住は炭化材の測量を行う。溝状遺構の掘り下げが進み底面が見え始めた。

5月14日（火）晴 1号住の埋甕炉の測量と床面の精査を行った。2号住は炭化材と周辺部土坑の断面測量を行う。又、掘り上がった1号住の学習会を調査団を対象に行つた。

5月15日（水）曇 1号住の周溝の平面測量と埋甕炉の断面測量を行った。2号住は測量終了後床面の精査を行う。溝状遺構の法面には小穴が多く確認された。

5月16日（木）曇 1号住と土坑の断面測量及び溝状遺構の掘り下げを行った。

5月17日（金）曇 1号住と土坑の断面測量と2号住の埋甕炉の平面、断面測量、溝状遺構の掘り下げを行った。全員での作業は本日にて終了した。辰野町の発掘調査団、福与老人クラブが見学に来た。

5月18日（土）晴 1号住の貼床の掘り下げを行った。2号住は平面測量と埋甕炉の平面測量を行った。上伊那郷土研究会会長の荻原貞利先生が視察に見えられた。

5月20日（月）晴 1号住の貼床の掘り下げを行う。2号住内の土坑、ピット、埋甕炉などの断面・平面測量を行った。

5月21日（火）晴 1号住は貼床を掘り下げ、又、ベルトの断面測量を行う。2号住は平面測量と各土坑の断面測量を行った。

5月22日（水）晴 2号住の測量全般と土坑等の写真撮影を行う。1号住の貼床の下から鉄片が出土した。大阪大学研究生北芳隆氏が視察に見えられた。

5月23日（木）晴 全体測量を行う。溝状遺構の法面の精査と調査区東壁の壁削りを行った。みのわ新聞が取材に来た。

5月24日（金）晴 全体測量の続きと溝状遺構の平面測量及び土層断面測量を行った。

5月27日（月）曇 調査区東壁の土層断面測量を行う。全体測量及びレベリングと溝状遺構の平面測量を行った。作業具置場に使用したテントの撤収も行った。

5月28日（火）晴 溝状遺構のレベリングと土層断面測量を行う。1号住の貼床の下の平面測量と断面測量を行った。

5月29日（水）晴 1号住の貼床の下の平面測量とレベリングを行った。県文化課指導主事が視察に見えられた。本日にて全ての作業を終了する。



### 第Ⅲ章 遺跡の状態

## 第1節 調査方法と結果概要

今回の調査を行う契機となった配水池建設は、P・C構造V=1,000m<sup>3</sup>の規模を要する配水池の他管理室も築造されることがあるが、これら施設の築造工法の関係で、全敷地面積918m<sup>2</sup>が却土・削平されるため、調査も全面積が対象となった。

調査はまず、土の堆積状況の把握と遺構・遺物の有無を確認するため、2m四方の試掘坑4ヶ所を設定し、手掘りによる作業から開始した。これによる土の堆積状況については後節にて詳細に記述するが、現在の畑地の耕土下から他の場所で削土・運搬によるものと思われる黄褐色土(Ⅱ層)の堆積が確認され、昭和51年から56年に実施された団体は塁整備事業工事の状況が確認された。そして更にこの人為的堆積層の下より、一部搅乱もみられたが比較的安定した黒褐色土(Ⅲ層)と遺構覆土の黒色土他の確認ができた。これら試掘作業の結果を踏まえて、重機による表土の除去を行い、その後手作業による遺構上面確認を行った。最終的には、全面積の上面確認を行ったが、作業を円滑に進めるため簡易のトレンチ設定による部分的な確認作業も取り入れ、またベルトコンベアの導入も行った。確認された遺構については、遺構の時期



### 第3回 調査区設定・調査範囲図

差に關係なく住居址・土坑などの種別ごと確認順に番号をつけた。グリッドは、5m四方で主軸を南北方向に併せて設定し、南北方向は北よりアルファベットを、東西方向は西よりアラビア数字を用いて標記した。また、ベンチマークは、福与区公民館の敷地内にある三角点より移動を行い、調査区北西部の道路上にベンチマーク（760.180m）を落とした。尚、調査記録は、平盤・やりかたの併用による測量と写真撮影を行い、できるだけ出土した遺構・遺物の状況を克明に記録することに努めた。

検出遺構の概要は次の通りである。

- ・竪穴式住居址 2軒（縄文時代1、古墳時代1）
- ・土坑 10基（縄文時代9、中世以降1）
- ・溝状遺構 1基（中世）

## 第2節 層序

伊那山地の南西麓より西方に伸びる、舌状台地の南側斜面に調査区が位置する（第3図）。この斜面は、緩やかに西南方向に向かって $4^{\circ}30'$ 前後をもって傾斜している。本調査区における土層断面の測量・観察等の記録は、調査区の東壁と南壁の2ヶ所にて行ったが、特に東壁においては地形の傾斜にそって土の堆積状況を観察するのに好都合であった。前節でも述べているが、ほ場整備事業による削平・置土がなされてはいるものの、畑地ということもあってか現地形に併せた工事のため、好運にも埋蔵遺構・物に大きな影響がなかったことは幸いといえる。

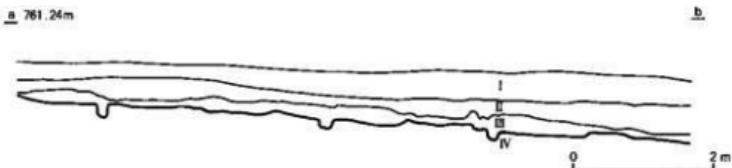
尚、本扇状地における基本地質構造は、耕作土等に黒褐色腐食土層・輕石・スコリア・ラブリを混入するローム（テフラ）層・花崗岩を主とする円礫・砂層となっている。

I層—暗茶褐色土（耕作土）。粘性・締りは弱く、長石・石英・雲母など花崗岩の風化砂礫がまばらに含まれる。

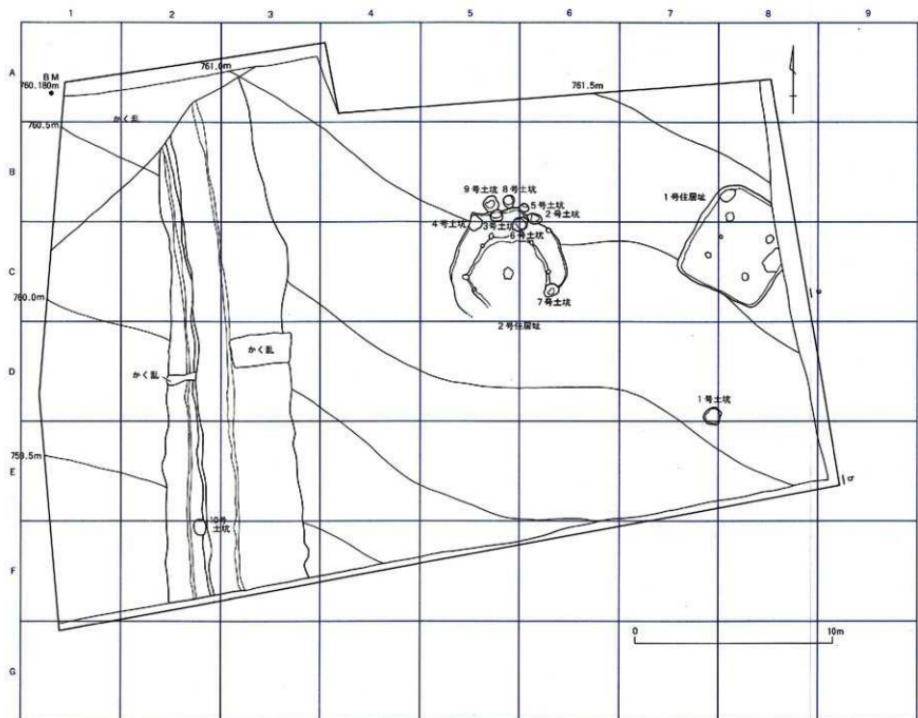
II層—黄褐色土。粘性・締りは共に強く花崗岩風化砂礫が多く含まれる。置土である。

III層—黒褐色土。粘性やや有り締りは強い。ロームブロック等の擾乱土が部分的に確認できる。

IV層—黄色土（ローム）。粘性は強いが締りはII層より弱い。本層確認面が遺構検出面である。



第4図 土層図



第5図 全体図

## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 住居址

#### 1. 1号住居址

遺構（第6図） 調査区の北東部、B-7・8、C-7・8グリッドに位置する。検出した住居址が一部調査区外の畝地に掛かり、また崩落等への注意も払って完掘はできなかった。主軸はN-60°-Wを示し、地形の傾斜方向にはほぼ直交している。規模は5.2m×4.9mで隅丸方形を呈し、わずかながら主軸壁（南・北壁）が短い。また掘り込みは、傾斜地に添って行っているため北壁は30cmと深く南壁は3cmと浅い。壁下には周溝が巡らされ、奥壁に2ヶ所焼土ブロックが確認された。尚床は、柱穴の内側は軟弱で外側は堅い貼床であった。

柱穴は、P<sub>1</sub> (41×33×61cm)・P<sub>2</sub> (32×26×58cm)・P<sub>3</sub> (27×26×60cm)・P<sub>4</sub> (41×40×54cm)の4穴で、等間隔の方形配列がなされる。プランは、平面形はほぼ円形であるが底面形は主軸に添って稍円形を呈する。

覆土は、7分層された。1層は黒褐色土で、粘性・締りは共に強い。2層は黒色土で、粘性・締りは共に強くローム粒子をまばらに含む。3層は黒褐色土で、粘性・締りは共に強くローム粒子をまばらに含む。4層は暗茶褐色土で、粘性・締りは共に上層よりやや弱く、ローム粒子を多く含む。5層は黄褐色土で、粘性は弱く締りは強い。大部分がローム粒子で占める。6層は黒褐色土で、粘性・締りはややある。ロームブロックを多く含む。7層は暗茶褐色土で、粘性はややあるが締りは最も強く、堅くたたき縮められている。遺物は特に3・4層に集中し、6・7層検出面までであった。尚、6・7層は床であり、7層は貼床である。

炉は、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>の中間に位置し、75×67cmの規模でほぼ梢円形を呈し、床面より30cmの深さで緩やかに鉢状に掘り込まれる。また中央部には、甕の胴上位部が逆位に埋め込まれた状態で出土しているが、甕の内外面共に火焼状況はなく埋甕炉としての要素は少ない。覆土は、3分層される。1層は黒褐色土で、粘性・締り共にややありローム・焼土ブロックをまばらに含む。2層は赤褐色土で、焼土である。3層は黒褐色土で、粘性・締り共にややありロームブロックをまばらに含む。

柱穴の他、前方壁ほぼ中央より不整形な土坑状の凹地とピット P<sub>6</sub> (24×12×30cm)が検出し、出入口施設と何らかの関連性を持つものと思われる。また北方コーナーより遺物の出土は認められなかつたが、貯蔵穴であろう土坑状の落ち込み P<sub>5</sub> (95×50×45cm)と、掘り方から P<sub>6</sub> の左側に P<sub>7</sub> (26×25×44cm)が検出している。

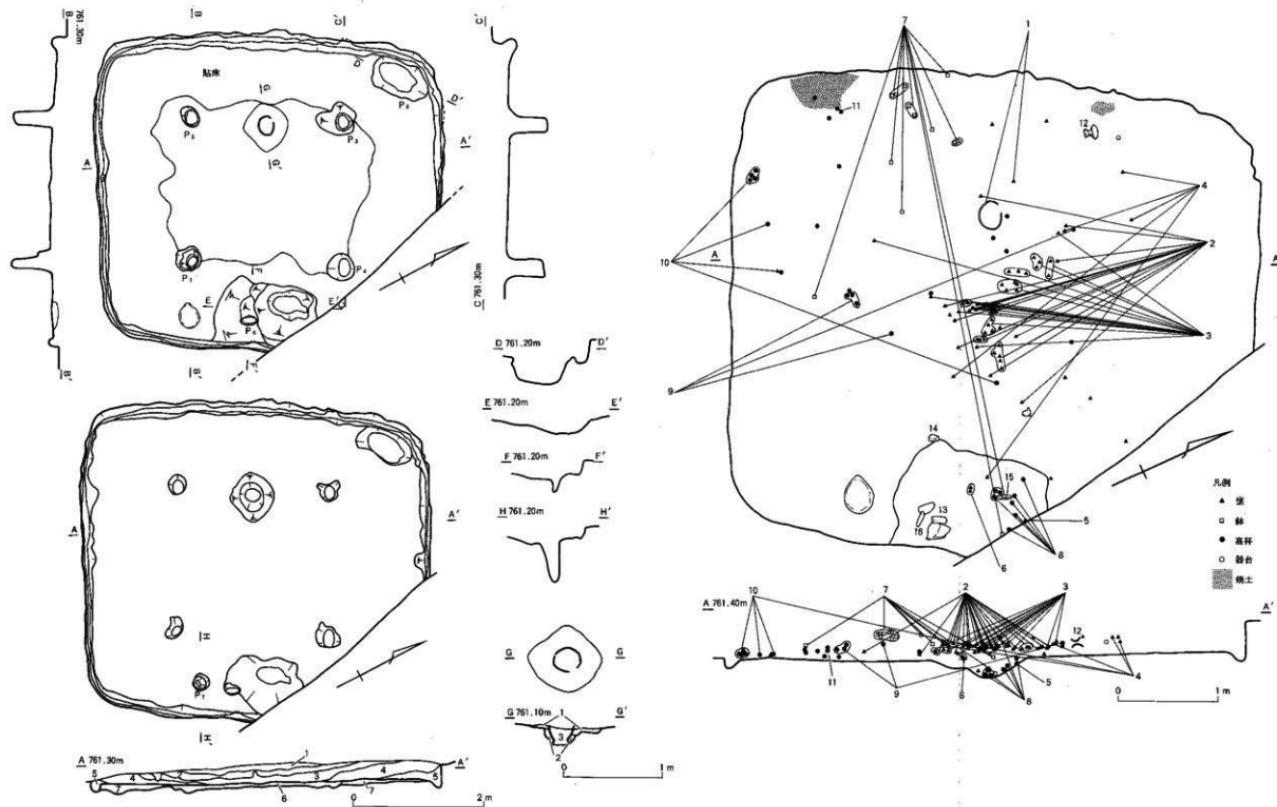
遺物（第7・8図） 土器は、若干繩文土器の混入はあるが、甕（1、2、3、4、5、6）、

鉢（7）、高環（8、9、10、11）、器台（12）等の良好な土師器の一括出土が得られた。個体として出土した1・12の他は、すべて破片によるものであり、住居址の中央部に出土が集中し、かつ散布状況はほぼ一定のまとまりをみせている（第6図）。また、石器も前方部に集中して3点の砥石（12、13、14）と混入物の磨製石斧（15）がある。尚、P<sub>6</sub>の左側床面直上に、花崗岩の平石が出土し、加工・使用痕は認められなかったが、作業台等の使用がなされていたものと考えられる。

尚、出土土器の諸特徴から、本住居址は古墳時代前期に位置づけられよう。

第2表 1号住居址出土土器観察表 (法量欄: 上段=口径、中段=底径、下段=器高)

番号	器種	残存度	法量	成形及び器形の特徴	調査	備考
1	壺	50	(%) 18.8 — (18.5)	・輪積成形 ・口縁部はほぼ直に立ち上がり、端部で外反する。胴部は球形を呈し、平底と思われる。	内) 口縁端部ヨコナデ、口縁部から胴部、横位ヘラナデ(ハケ?) 外) 口縁端部ヨコナデ、口縁部から端部にかけて縦位ヘラナデ(ハケ?)、以下横位ヘラナデ	・焼成良好 ・橙褐色 ・欠損部位には二次的に面取りがなされる。
2	壺	30	— 6.8 (17.3)	・輪積成形 ・胴部は球形を呈し、平底である。	内) ユピナデ後、横位ヘケ(ヘナダ?) 外) ユピナデ後斜位ヘケ(ヘナダ?)	・焼成良好 ・明茶褐色 ・灰化物付着
3	小型壺	20	13.4 4.8 (11.5)	・輪積成形 ・口縁部は緩やかに外反し、腹部は屈曲せず、胴部はほぼ球形を呈する。	内) ハケ後、口縁端部ヨコナデ。以下ヘケズリ 外) ハケ後、口縁端部ヨコナデ。以下ヘケズリ	・焼成良好 ・茶褐色 ・長石を主とする砂礫が多く含む。
4	壺 (台部)	10	— 11.6 (2.0)	・輪積成形 ・台端部、内面折り返し ・「八」の字状に開く	内) ナデ 外) ナデ	・焼成良好 ・橙褐色 ・長石を主とする砂礫を含む
5	壺 (口縁部)	—	— — —	・S字口縁部の口縁部片のみ	内) ヨコナデ 外) ヨコナデ	・焼成良好 ・暗茶褐色
6	壺 (胴部)	—	— — —	・輪積成形 ・S字口縁部の胴部片のみ ・5と同一個体の可能性あり	内) ナデ 外) ヘラケズリ後、縦位にカキメ状のハケ	・焼成良好 ・暗茶褐色 ・内面灰化物付着
7	鉢	35	14.8 — (7.3)	・輪積成形 ・口縁部は、つまみ上げられて、ほぼ直に立ち上がり、あわゆく寄せず、まっすぐ底部に集約する。	内) 口縁部ヨコナデ。以下ヘナダ 外) 口縁部ヨコナデ。以下ヘナダ	・焼成良好 ・橙褐色
8	高環	40	12.6 17.8 9.8	・脚部のホンジはナシ。 ・内側は、内側にして立ち上がり、周囲は「八」の字状に外反する。 ・脚部は「八」の字状に外反し、約1.7cm前後の隙間の空孔3箇を有する。	内) フル部、放射状に2段のヘラミガキ 脚部、ヘラケズリ 外) 不規則ヘラケズリ 脚部、ヘラケズリ後縦位ヘラミガキ	・焼成良好 ・橙色 ・胎土は、よく精選され、ち密
9	高環 (环部)	50	14.2 — (4.8)	・环部は内溝して立ち上がり、脚部はつまみ上げられる。	内) 放射状に2段のヘラミガキ 外) ヘラケズリ後、縦位ヘラミガキ	・焼成良好 ・橙色 ・胎土はよく精選されて、ち密
10	高環 (脚部)	40	— 9.6 (5.2)	・脚部は「八」の字状に外反する。	内) ヘラケズリ、脚部ヨコナデ 外) ヘラケズリ後ヘラミガキ、脚部ヨコナデ	・焼成良好 ・橙色 ・胎土はよく精選され、ち密

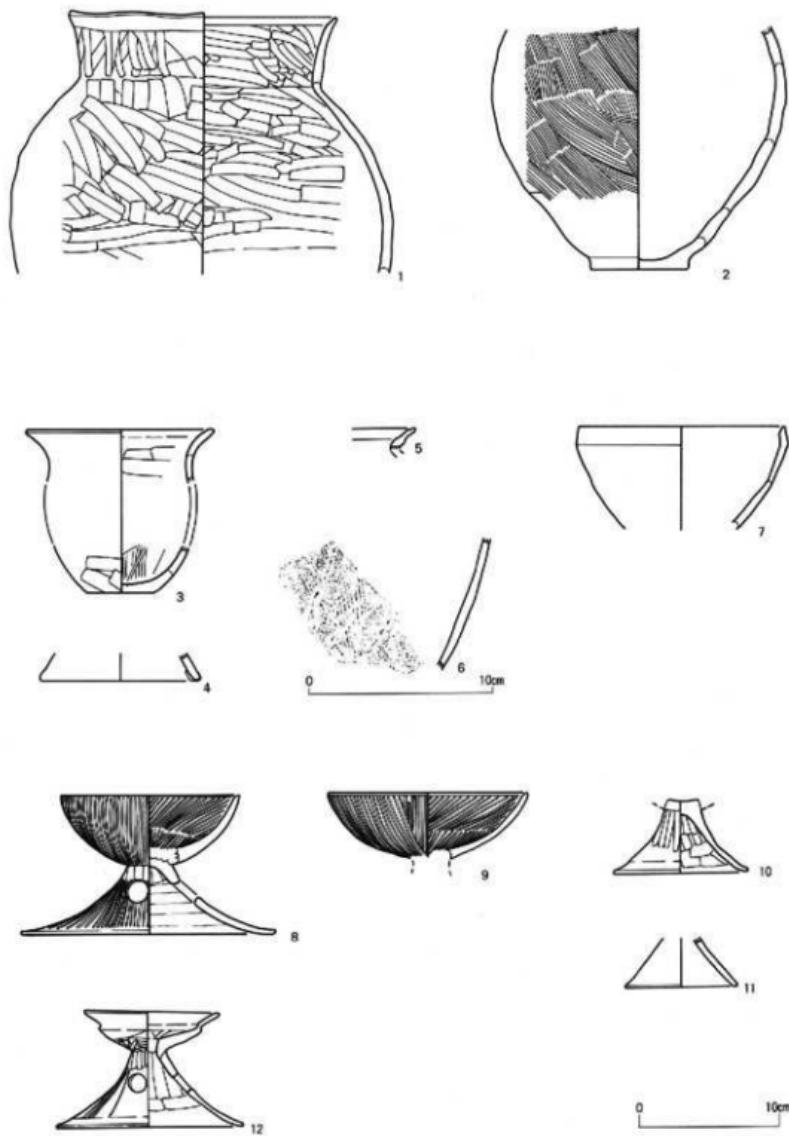


第6図 1号住居址実測図、掘り方実測図、遺物出土状況図

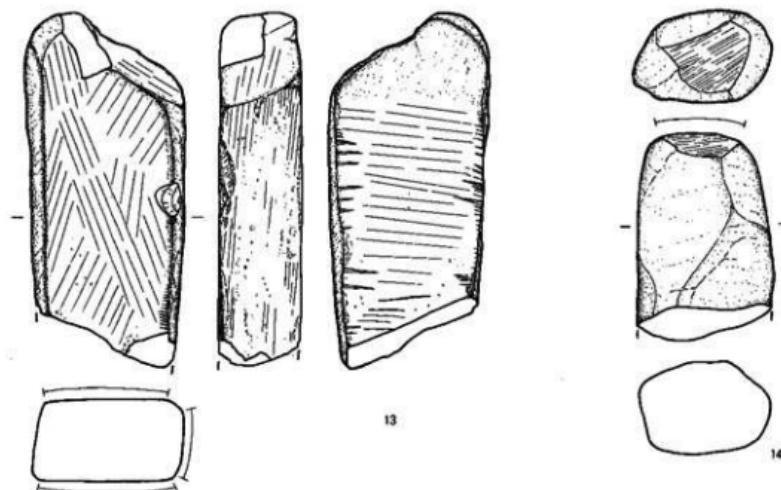
11	高坪 (脚部)	10	— 4.0 (3.5)	・「ハ」の字状に外反する	内)ナデ 外)ヘラケズリ後ナデ	・焼成良好 ・橙色 ・胎土は砂質
12	器台	90	9.6 13.4 8.2	・脚部部外縁を有し、口縁部は 内)4.5cm、外)5.5cmで、脚部部内縁に 1.0cmの穿孔を有する。 ・脚部中央やや上部に約1.4~ 1.5mmの穿孔を3個有し、「ハ」 の字状に外反する。	内)ナデ後、内)脚部部ヨコナデ、ヘラ ケズリ後、ヘラミガキ (?) 脚部、ヘラケズリ後、脚部ヨコナデ 外)ナデ、ヘラケズリ後、脚部ヨコナデ 脚部、ヘラケズリ後、脚部ヨコナデ ヨコナデ	・焼成良好 ・明褐色 ・胎土はよく精選され、ち密ではある が、やや砂質。

第3表 1号住居址出土石器観察表 (法量欄: 上段=長さ、中段=最大幅、下段=厚さ)

番号	分類	石質	法量 (cm) (19.1)	重さ (g)	特徴	備考
13	砥	石	砂岩 8.2 4.4	1205.0	・使用面は表・裏2面で、縱・横・斜方向に 磨痕が認められる。 ・側縁には、横方向に條状の研ぎ跡が認められる。	・基部欠損
14	砥	石	粘板岩 7.0 4.9	590.0	・頂部に平坦な磨面を有し、ほぼ同一方向に 磨痕が認められる。	・基部欠損
15	砥	石	粘板岩 16.0 3.5 2.4	230.0	・使用面は、表・裏・側の3面を有し、縱・ 斜方向に磨痕が認められる。 ・表面は、使用度が激しく、中央部が抉られ るように磨り減る。	
16	磨製石斧 (乳棒状)	輝石岩	15.8 5.1 3.7	500.0	・表・裏・側面は敲打による細かいなびき(成形 痕?)が認められる。 ・刃部は、中央より基部に向かって突出しており、 使用痕と思われる磨減と、剥離により、後退 をみせる。 ・底部は敲打による磨減と後退が認められる。	

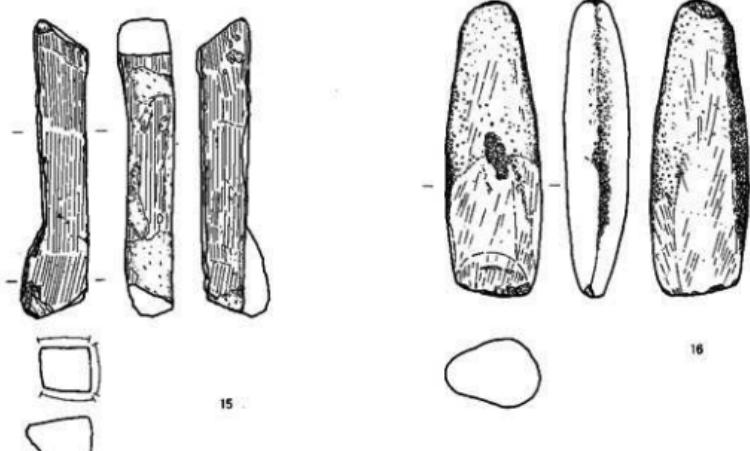


第7図 1号住居址出土遺物実測図1



13

14



15

16

0 10cm

第8图 1号住居址出土遗物实测图2

## 2. 2号住居址

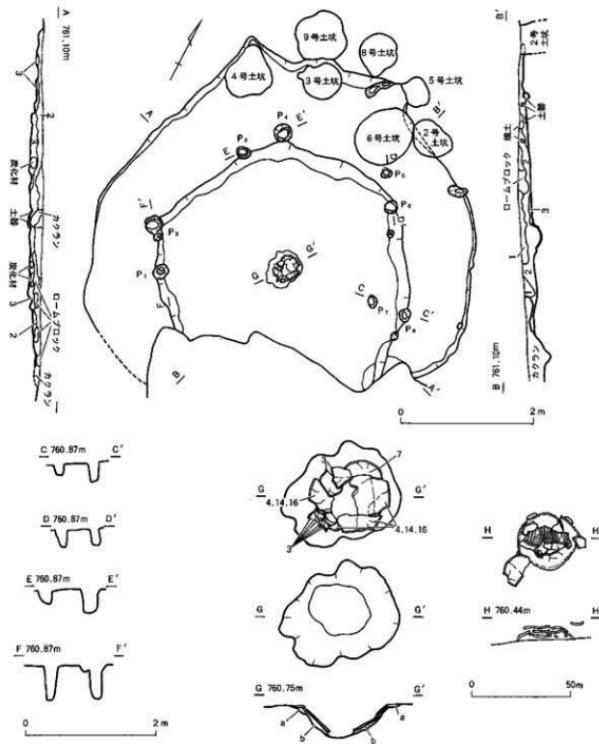
遺構（第9図） 調査区の中央部、B-5・6、C-5・6グリッドに位置する。住居址の上部は削平され、壁の残存しない箇所もあり一部床面の広がりでプランを確認する。また、掘削による擾乱もされていた。主軸は、検出状況が前述のとおりであるため測定不可能と言える。規模は最大径5.85mを測り、ほぼ円形を呈するプランである。床は全体的に堅く敲き締めではいるが、緩やかに傾斜する地形に添う形で床面も約3°の傾斜をみせる。また、ほぼ中央部に位置する炉より半径1.8~2.0mの円形を描き、床が比高差5~10cmを持って一段上がる。壁下よりベット状に外周をみせる二重構造を示していた。更に、覆土ないし床面より全域的に炭化した木材（柱状、板状）と、焼土が出土し、火災に見舞われたものと考えられる。尚、本住居址は2~9号土坑と重複しており、プラン確認における切り合い状況において、4号土坑以外の土坑が新期に築いたものと認められた。また4号土坑の上部は、ロームによる貼床を行なっている。

柱穴は、P<sub>1</sub> (25×19×54cm) · P<sub>2</sub> (28×28×51cm) · P<sub>3</sub> (20×17×20cm) · P<sub>4</sub> (27×26×36cm) · P<sub>5</sub> (15×12×25cm) · P<sub>6</sub> (19×17×27cm) · P<sub>7</sub> (18×13×17cm) · P<sub>8</sub> (18×17×31cm) の8穴が床の段部ないし隣接して2穴一単位で等間隔で検出された。プランは円形で統一性は認められるが深さはばらつきがみられる。

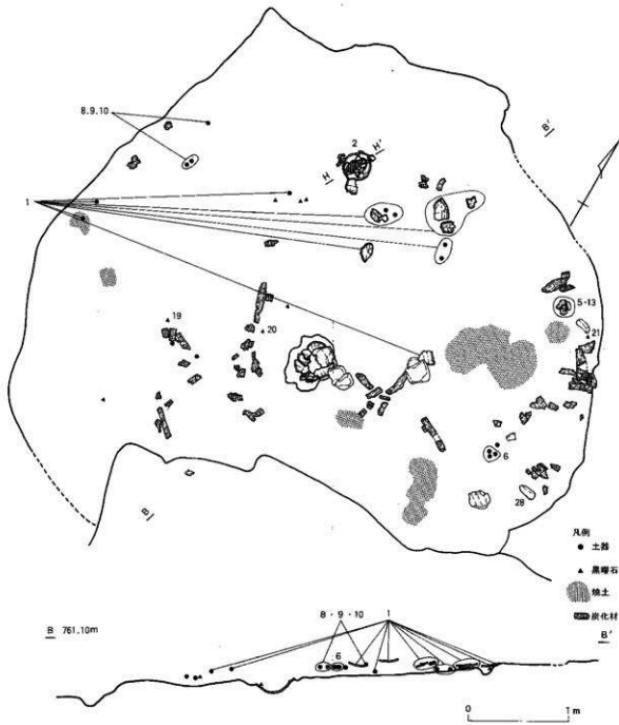
覆土は、3分層された。1層は黒褐色土で、粘性はあまりないが締りは強い。炭化物・ロームブロックを多く含む。2層は明茶褐色土で、粘性はややあり締りは強い。炭化物・焼土を多く含み、ロームブロックないしローム粒子の割合が高い。3層は暗茶褐色土で、粘性はややあり締りは強い。焼土・ロームブロックを多く含み特に炭化材を本層より多く出土する。また遺物は、2・3層より多く出土する。

炉は、58×47cmの規模で平面は不正橿円形を底面は円形を呈する。そして、すり鉢状に18cmの深さで掘り凹められ、壁面には極度の火焼状況を示す焼土（b層）が厚く認められた。またその表面には2個体分の土器が貼り付けられていた。

遺物（第9~13図） 床面ないし覆土下部、炉内より土器（1~17）、石器（18~30）の出土があった。出土量はあまり多くはなかったものの、個体となる土器の出土がある程度一箇所に集中しており、石器も石錐（18~20）、石錐（21）、使用痕のある剥片（22~24）、石核（25、26）、打製石斧（27）、特殊磨石（28）、磨石・敲石・圓石（29、30）など製品ないし加工途中の出土が目立つ。尚、出土土器の諸特徴から、本住居址は縄文時代前期末葉に位置づけられよう。



第9図 2号住居址実測図・遺物出土状況図

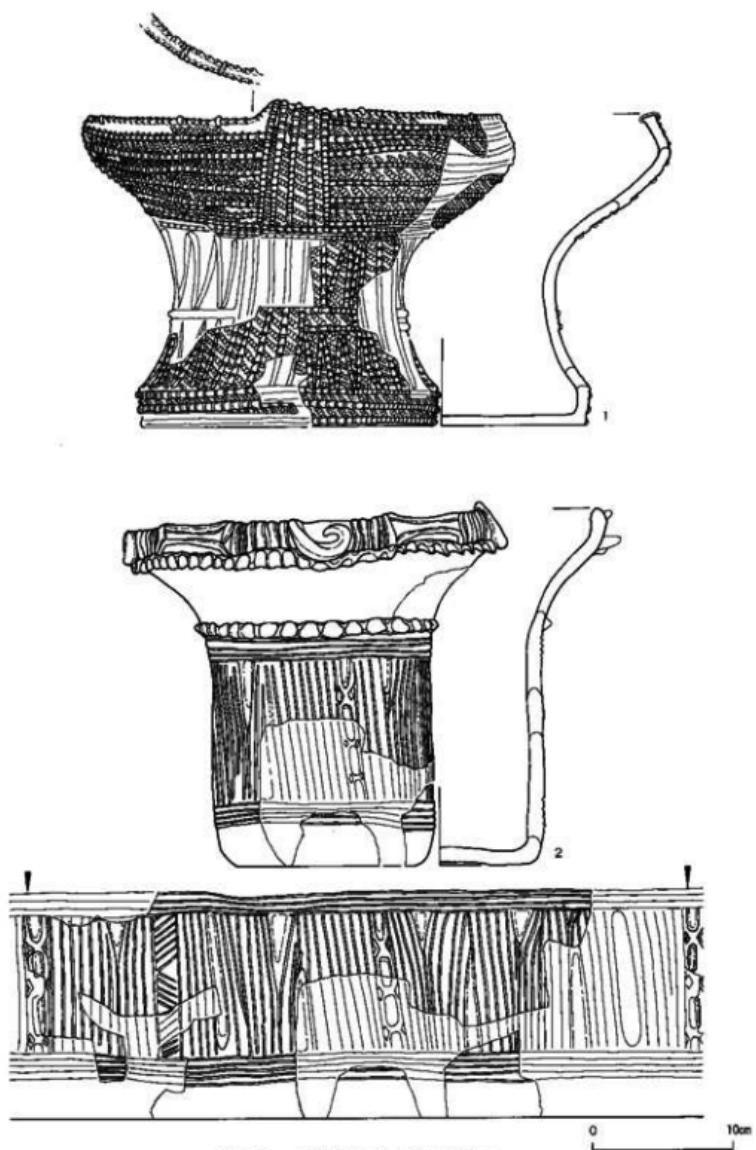


第4表 2号住居址出土土器観察表 (法量欄: 上段=口径、中段=底径、下段=高さ)

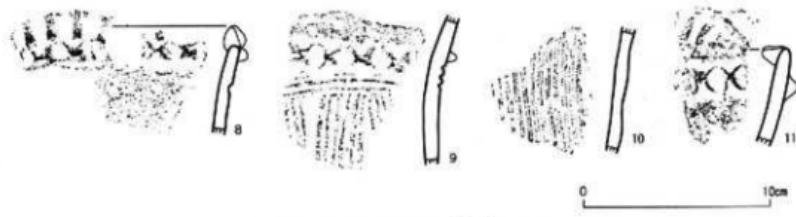
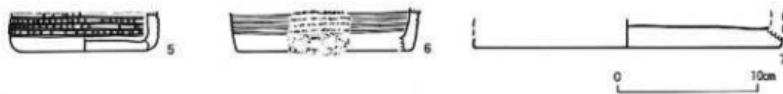
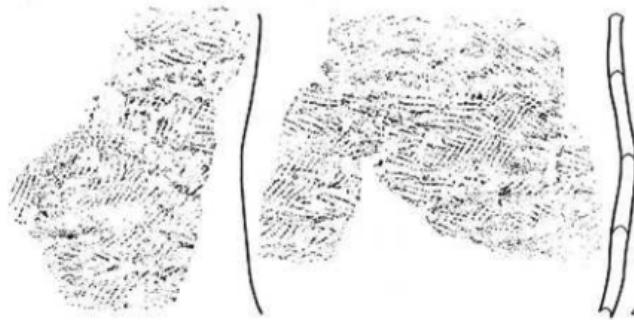
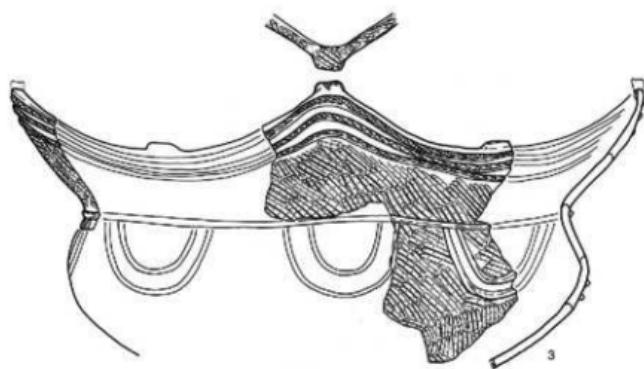
番号	器種	残存度	法量	成形及び器形の特徴	文様及び調整	備考
1	深鉢	50	(%) 29.5 20.8 23.3	・輪積み成形 ・口縁部は、腹面から朝顔状に外反しながらキャラバ一文字に内湾する。 ・底部は半円状にくびれ構造で「く」の字に内折し、底前に立る。	・単節R L繩文を地文とし、ソーメン状の粘土紐貼付後、半截竹管状工具により結筋文を施す。 ・口縁部は面取り後、結筋文、ソーメン状粘付文突起一ヶ所を有する。	・暗茶褐色 (一部黄褐色)
2	深鉢	90	25.7 12.6 24.6	・輪積み成形 ・口縁部は、頭部より朝顔状に外反し、段を持って直に立ち上がる。	・口縁部は粘土紐による貼付文と指頭(棒)状圧痕、陰帶文を、 腹部は、半截竹管状工具による横位沈錐凹面による、縦位沈錐紋文を施す。	・暗茶褐色 ・石英、長石、雲母等の砂粒を含む。
3	深鉢	20	43.4 — (20.6)	・輪積み成形 ・口縁部は、キャラバ一文字に内湾しながら外反する4段位の波状内縁を呈する。頭部は「く」の字形に内折して、底部は球形状に膨らむ。	・無筋R L繩文を地文とし、粘土紐貼付後、口縁部のみ無筋R L繩文を施す。 ・波状口縁の外端とくびれ部に小窪記を有し、結筋R L繩文を施す。	・黄褐色 ・石英、長石、雲母等の砂粒を含む。 ・炉内出土
4 14 5 16	深鉢	20	— (21.3)	・輪積み成形 ・頭部はややくびれ、腹部は緩やかに膨らみをみせる。	・無筋R Lの羽状繩文を施す。	・暗褐色 ・長石、石英、雲母等の砂粒を多く含む。 ・炉内出土
5 13	深鉢	10	— 9.0 (2.7)	・輪積み成形 ・頭部はほぼ直線的に立ち上がる。	・ヘラ切りによる厚線文	・暗茶褐色 ・長石、石英、雲母等の砂粒を多く含む。
6	深鉢	5	— 12.6 (3.0)	・輪積み成形 ・頭部はほぼ直線的に立ち上がる。	・半截竹管状工具による沈錐文	・暗茶褐色 ・砂粒を多く含む。
7	深鉢	10	— 22.1 (1.5)	・輪積み成形		・暗褐色 ・砂粒を多く含む ・炉内出土
8 10	深鉢	—	— — —	・口縁部は「く」の字に内折する	・口縁部ソーメン状粘土紐貼付文、斜突列点文、指頭(棒)状圧痕帯文。 ・腹部沈錐文	・暗茶褐色
11	深鉢	—	— — —	・口縁部「く」の字に内折する	・ソーメン状粘土紐貼付文、指頭(棒)状圧痕帯文	・暗茶褐色
12	深鉢	—	— — —	・キャラバ一文字に内湾する	・ヘラ状工具によるナデ後、指頭(棒)状圧痕帯文	・黄褐色
17	深鉢	—	— — —		・無筋R L繩文	・暗茶褐色

第5表 2号住居址出土石器観察表 (法量欄: 上段=長さ、中段=最大幅、下段=厚さ)

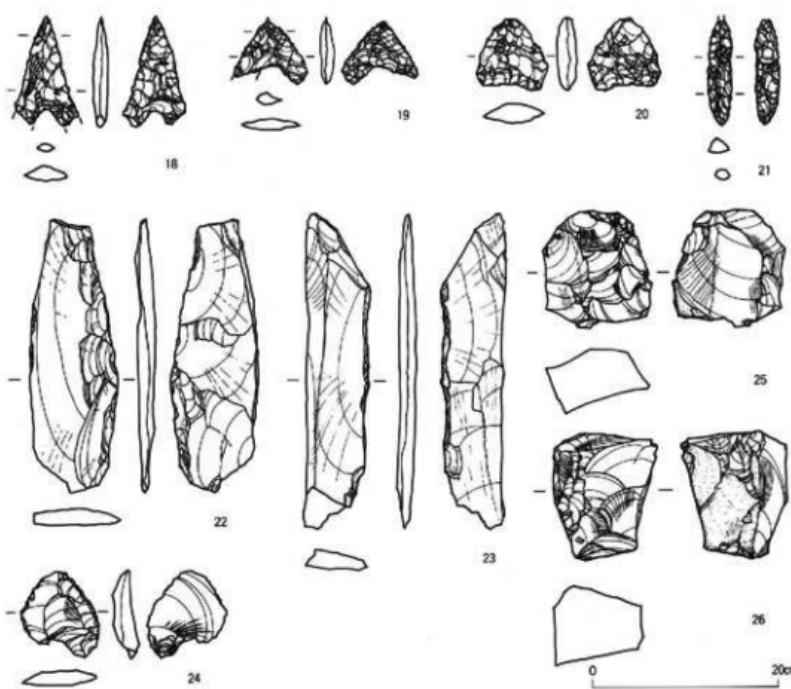
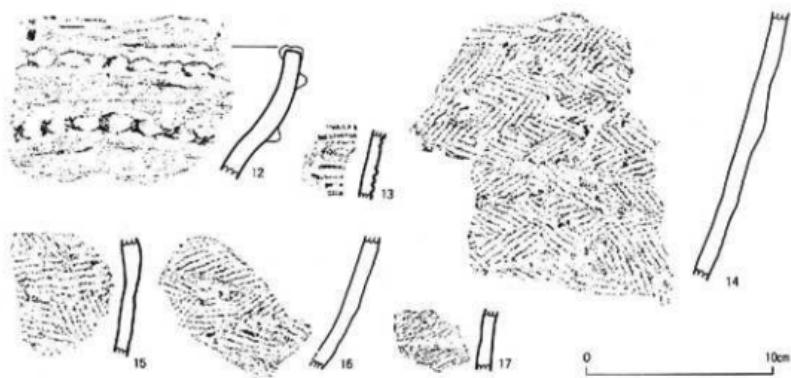
番号	分類	石質	法量	重さ	諸特徴	備考
			(cm) (2.9) (1.7) 0.4	(g) (1.0)		
18	石 錐	黒曜石			・凹基無茎石錐 ・両面調整による丁寧な作出が成され、断面は菱形を呈する。	・両脚部欠損
19	石 錐	黒曜石	(1.7) (2.0) 0.3	(0.6)	・凹基無茎石錐 ・両面調整による丁寧な作出が成され、断面はレンズ状を呈する。	・先端、片脚部欠損
20	石 錐	黒曜石	1.9 1.9 0.6	1.6	・平基無茎石錐 ・先端及び両脚部が丸く、鋭い作出は行っていない。 ・製作途中の未製品の可能性あり。	
21	石 錐	黒曜石	(2.8) 0.5 0.4	(0.6)	・両面調整により、断面三角形を呈する。	・先端部(?)欠損
22	小型剥片石器	頁岩	7.3 2.4 0.5	9.3	・剥片の一側縁を刃部として使用し、片面に細かな剥離(使用痕)が認められる。	・炭化物付着
23	小型剥片石器	頁岩	(8.5) 1.7 0.5	(7.4)	・剥片の一側縁を刃部として使用し、両面に細かな剥離(使用痕)が認められる。	・基部欠損
24	小型剥片石器	黒曜石	2.4 2.0 0.4	1.6	・剥片の両側縁を刃部として使用し、片面に細かな剥離(使用痕)が認められる。	
25	石 核	黒曜石	3.2 2.8 1.3	13.9	・部分的に重度の敲打痕が認められる。	
26	石 核	黒曜石	3.4 2.8 2.0	19.8	・部分的に重度の敲打痕が認められる。	・自然面あり
27	打製石斧	砂岩	6.1 4.6 1.3	50.0	・挖形に属する小型品で、刃部及び頂部には片面のみへの後退と思われる剥離が認められる。	
28	特殊磨石(敲石)	砂岩	17.0 7.8 4.8	960.0	・断面橢円形を呈する転石の一稜部に磨面を作出する(スクリートーン表示)。また、磨面の縁には敲打による剥離痕を残す。 ・頂・基部には、敲打による磨滅が認められる。	
29	磨石・敲石・圓石	花崗岩	12.7 6.0 -	660.0	・円柱状の石材の側面に磨面を7面作出す。 ・底・裏面の中央部に凹痕を有し、その他傷状の凹痕も認められる。 ・頂・基部には敲打による磨滅と剥離が残る。	
30	敲石・圓石	砂岩	15.5 4.0 2.3	295.0	・基部に敲打による磨滅と剥離が、表・裏面には傷状の凹痕と一部磨痕が認められる。	



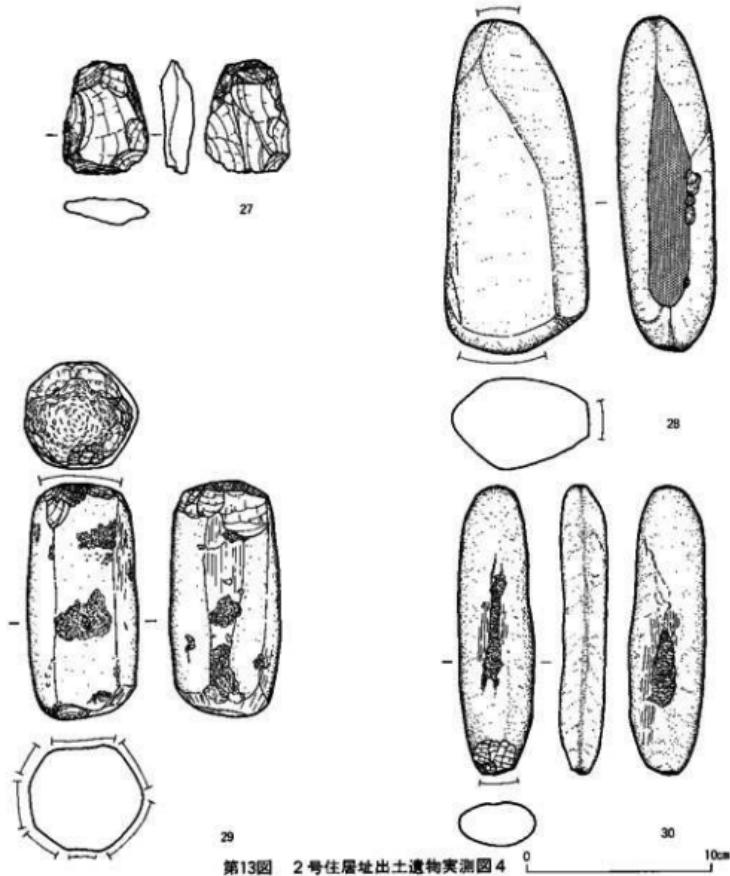
第10図 2号住居址出土遺物実測図1



第11図 2号住居址出土遺物実測図2



第12図 2号住居址出土遺物実測図3



第13図 2号住居址出土遺物実測図4

## 第2節 土 坑

遺構（第14図） 本調査区より10基の土坑が検出され、出土遺物・形態の特徴・他の遺構との切り合い状況から縄文時代前期末葉（1～9号）と中世以降（10号）が検出された。縄文時代前期末葉に位置づけられる土坑は、2号住居址内外に主に集中しており、平面プランに対し壁がやや内側に抉って掘り込まれ、断面が台形もしくはフラスコ形を呈する一群（1～6号）と、断面が半円形で入り鉢状に掘り込まれるもの（7～9号）とに更に分けられる。中でも4号土坑は、壁がおびただしく焼けており、覆土においても炭化物が主となる層（8層）と焼土が主となる層（7層）が認められ、使用目的等の内容は不明であるが他の土坑とは大きな違いをみせていた。

遺物（第15図） 1・4号土坑よりまとまった遺物の出土がみられた。出土した遺物は、土器及び石器で、土器は縄文時代前期末葉に比定されよう（1～11）。また石器は、1号土坑より特殊磨石（12）1点のみの出土だった。

第6表 土坑一覧表（規模：上段＝長径、中段＝短径、下段＝深さ）

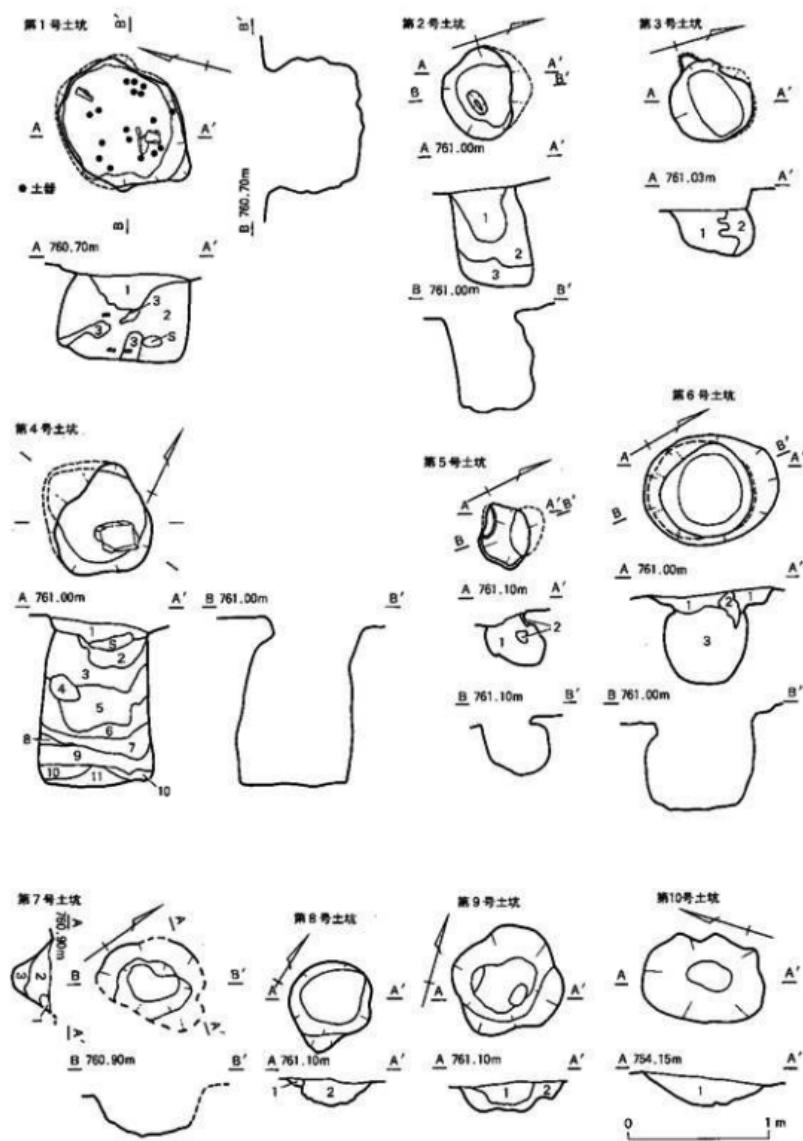
番号	平面形	断面形	規模 (cm)	覆 土			備考
					しまり	粘性	
1	不正 橢円形	台形 (一部 袋状)	110 80 70	1層：黒褐色土(ローム、炭化物をわずかに含む) 2層：明茶褐色土(ローム、炭化物をわずかに含む) 3層：かく乱	中 弱	中 強	
2	椭円形	台形	66 50 70	1層：黒褐色土(ロームブロックをまばらに含む) 2層：暗茶褐色土(ロームブロックをまばらに含む) 3層：明茶褐色土(ロームブロックをまばらに含む)	中 弱 弱	強 強 強	2号住居址を切 る
3	不正円形	プラスコ形 (一部 袋状)	70 54 50	1層：明茶褐色土(ロームブロックをまばらに含む) 2層：黄褐色土(ロームブロックを多く含む)	中 弱	強 強	2号住居址を切 る
4	不正円形	台形	84 70 120	1層：黄褐色土(ローム・2号住居址の床) 2層：暗茶褐色土(ロームブロックをわずかに含む) 3層：黒褐色土(ロームブロックをわざかに含む) 4層：ロームブロック 5層：明茶褐色土(ロームブロックをまばらに含む) 6層：黄褐色土(ロームブロックを多く含む) 7層：赤褐色土(焼土) 8層：炭化物ブロック 9層：黒褐色土(炭化物層) 10層：暗茶褐色土(ロームブロックをまばらに含む) 11層：黄褐色土(ソフトローム層)	中 弱 弱 弱 弱 弱 弱 弱 弱 弱 弱	中 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中	2号住居址に切 られる
5	円形	プラスコ形 (一部 袋状)	50 40 40	1層：黒褐色土(ロームブロックを含む) 2層：かく乱	中	強	2号住居址を切 る
6	円形	プラスコ形	70 66 70	1層：暗茶褐色土(炭化物をまばらに、ロームブロックを多量 に含む) 2層：ロームブロック 3層：暗茶褐色土(ロームブロックを多量に含む)	強 強 中	強 中 中	2号住居址を切 る
7	不正 橢円形	半円形	(82) (58) 36	1層：黄褐色土(ローム) 2層：暗茶褐色土(炭化物をわずかに含む) 3層：明茶褐色土(ロームブロックをわざかに含む)	中 中 弱	中 中 強	2号住居址を切 る
8	円形	半円形	68 60 20	1層：黄褐色土 2層：暗茶褐色土(ローム粒子をまばらに含む)	強 強	中 中	
9	円形	台形	80 80 22	1層：暗茶褐色土(ロームブロックをまばらに含む) 2層：黄褐色土(ロームブロックをまばらに含む)	強 強	中 中	
10	橢円形	半円形	86 66 24	1層：黒褐色土(ローム粒子をまばらに含む)	中	中	溝状遺構を切る。

第7表 土坑出土土器観察表 (法量欄: 上段=口径、中段=底径、下段=器高)

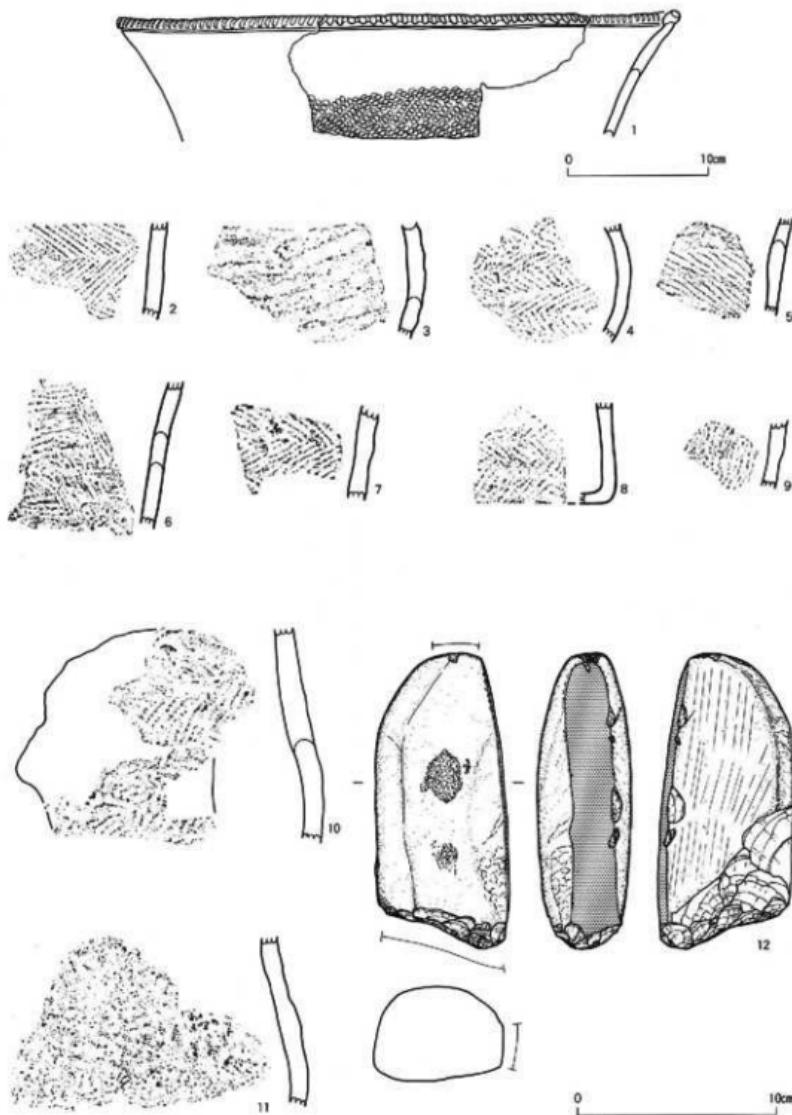
番号	器種	残存度	法量	成形及び器形の特徴	文様及び調整	備考
1	深鉢	10	(%) 40.4 — (9.8)	・輪積み成形 ・口縁部は、朝顔状に外反する。	・口縁端部は、指頭(縫)圧痕を施し、無文部(ナデ)を持つ、単節LRの羽状縞文を有する。	・暗茶褐色 ・砂粒を含む ・1号土坑
2	深鉢	—	— — —		・羽状沈藻文	・黄褐色 ・1号土坑
3	深鉢	—	— — —		・ヘラ状工具によるナデ	・橙褐色 ・砂粒を多く含む。 ・1号土坑
4	深鉢	—	— — —		・無節RLの羽状縞文	・暗茶褐色 ・砂粒を多く含む ・1号土坑
5	深鉢	—	— — —		・無節RLの斜縞文(?)後、ナデ。	・暗茶褐色 ・砂粒を多く含む ・1号土坑
6	深鉢	—	— — —		・不規則な無節RLの羽状縞文	・暗茶褐色 ・砂粒を多く含む ・1号土坑
7	深鉢	—	— — —		・無節RLの羽状縞文	・暗茶褐色 ・砂粒を多く含む。 ・1号土坑
8	深鉢	—	— — —		・単節LRの羽状縞文	・暗茶褐色 ・砂粒を多く含む ・1号土坑
9	深鉢	—	— — —		・無節RL縞文	・暗茶褐色 ・砂粒を多く含む ・9号土坑
10	深鉢	—	— — —		・無節LRの羽状縞文、無文部を有する。	・暗茶褐色 ・外面炭化物付着 ・砂粒を多く含む ・4号土坑
11	深鉢	—	— — —		・部分的に単節LR縞文。指頭圧によるナデ	・暗茶褐色 ・砂粒を多く含む ・4号土坑

第8表 土坑出土石器観察表 (法量欄: 上段=長さ、中段=最大幅、下段=厚さ)

番号	分類	石質	法量	重さ	諸特徴	備考
12	特殊磨石・圓石・敲石	綠泥岩	(cm) 15.9 7.2 5.0	(g) 970.0	・断面三角形の一級部に磨面を作出し、やや湾曲する。また、縫には敲打による剥離が残る。 ・頂・基部には、敲打による磨耗、後退が認められる。 ・表面には、傷状の凹痕が、裏面には磨痕が認められる。	・1号土坑



第14図 土坑実測図



第15圖 土坑出土遺物實測圖

### 第3節 溝状遺構

遺構（第16図） 調査区の西部A-2・3、B-2・3、C-2・3、D-2・3、E-2・3、F-2・3グリッドに位置する。最大7.0mではほぼ一定の幅を有し、深さは0.9~1.2mを測り、主軸はS-5°-E方向ではほぼ北方から南方へ直線的に走る。調査、確認し得た長さだけでも25mにも及び、調査区外の北方、南方にも本遺構が残存し続くものと思われる。構造は、基本的に断面「V」字型を呈して掘り込まれ、法面は全体的に堅く蔽きしめられていた。そして西側法面はほぼ直線的に傾斜するが東側法面は幾つかの不明瞭な段部を有して傾斜している。これらの諸特徴と後述する出土遺物の内容から、城郭施設にみられる堀切で諸薬研の堀と考えられる。また本遺構の西側には、幅が1.5~2.0m、深さ0.3mでは「V」字状に掘り込まれる小規模な溝が隣接する。当初本遺構とは別の溝状遺構として考えていたが、堆積土にみられる切り合ひ状況が不明瞭でかつ同一もしくはかなり類似性の高い堆積土であるため、本遺構に付随する施設として捕らえた。覆土は11分層された（第16図）。

遺物（第17図） 土器は縄文土器（5・6）、土師器・須恵器（1・2・7・8）、灰釉陶器（3）、鉄釉陶器（4）、内耳土器が、石器は石鎌（10・11）、打製石斧（12・13）、磨製石斧（14）が、更に古錢として「開元通宝」1点（9）が出土し特に5・7層に集中していた。土器はすべて破片のみで、出土量は少なく時期を明確に示すものはみられなかつたが、遺構の特徴と数少ない遺物から、室町～戦国時代に位置づけられよう。

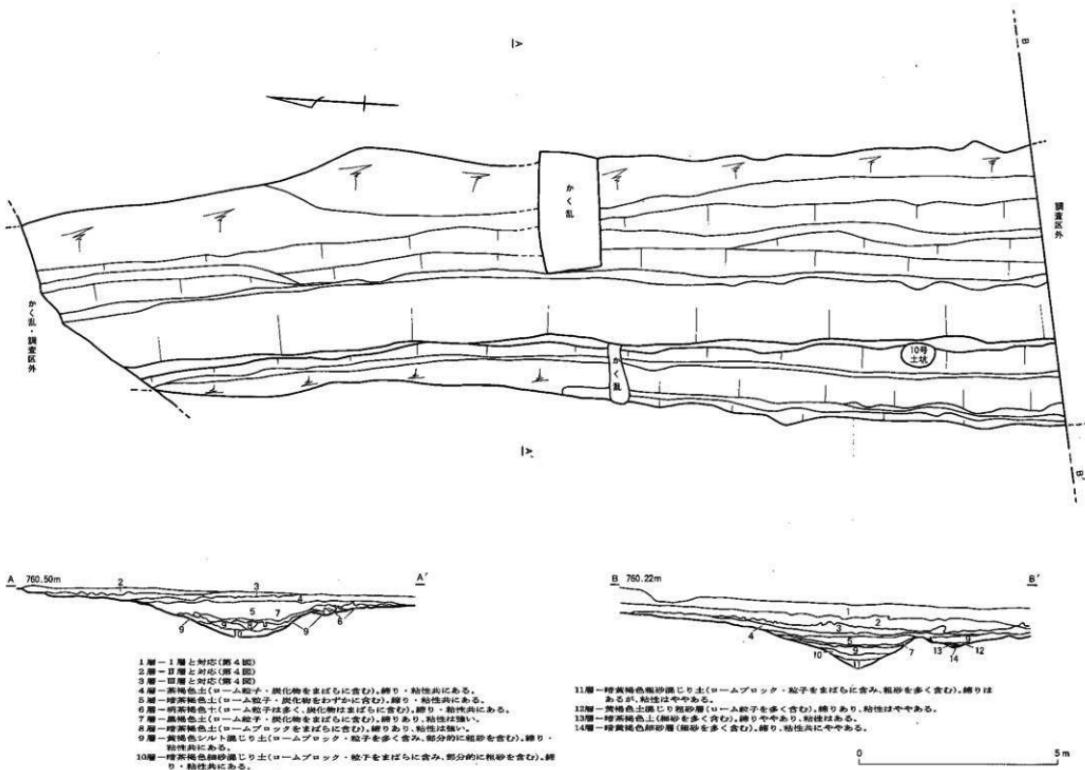
第9表 溝状遺構出土土器観察表（法面幅：上段=口径、中段=底径、下段=器高）

番号	器種	残存度	法量	成形及び器形の特徴	文様及び調整	備考
1	环 須恵器	5 (%)	12.3 (cm) — (2.7)	・ロクロ成形 ・底部回転糸切り	内)ロクロナデ 外)ロクロナデ	・灰色 ・焼成良好 ・小縫がまばらに含まれる。
2	环 須恵器	10	— 6.0 (1.0)	・ロクロ成形、底部回転糸切り	内)ロクロナデ 外)ロクロナデ	・赤褐色 ・焼成良好
3	病 灰釉陶器	10	— 11.6 (2.0)	・ロクロ成形、底部回転糸切り後 台部貼り付け。	内)ロクロナデ 外)ロクロナデ	・乳白色 ・焼成良好
4	碗(?) 鉄釉陶器	5	— 7.0 (1.9)	・ロクロ成形、台部ヘラによるケズ り出し。	内)全面に釉薬付着 外)ヘラ切り	・灰色 ・焼成良好
5	深鉢 縄文	—	— — —		・地文に縄文を施し、半截竹管 状工具による沈線文。	・青茶褐色 ・中期初頭？

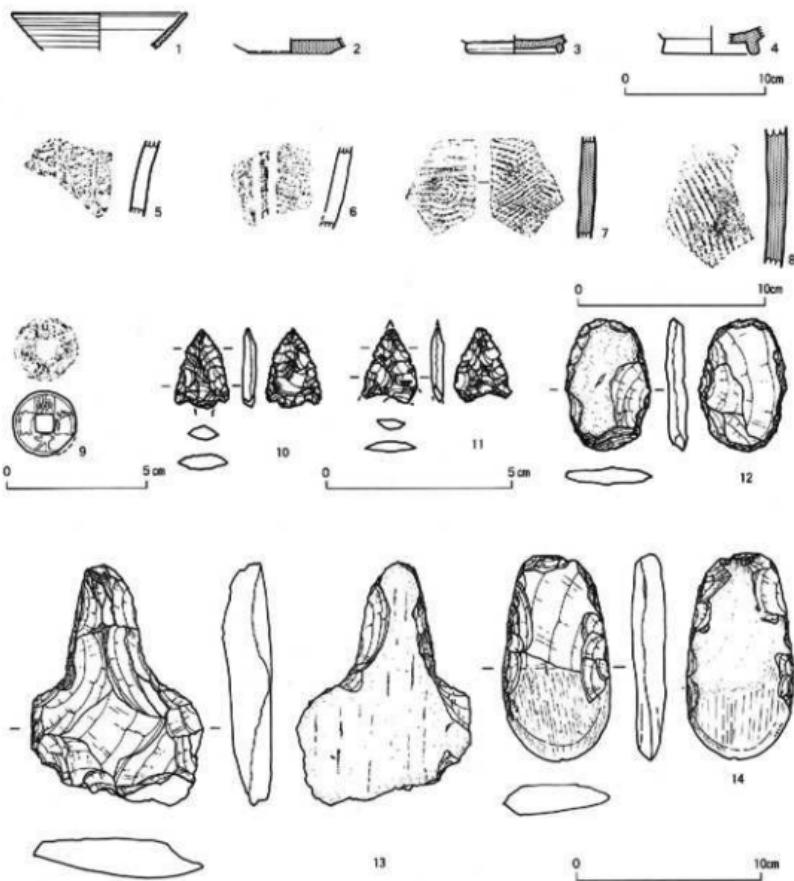
6	深鉢 縄文	-	- - -		・地間に单筋L R 縄文を施し、棒状工具による継位平行沈線文。	・明茶褐色 ・中期後葉
7	甕 須恵器	-	- - -		内)叩き目(同心円文) 外)叩き目(格子目?)	・灰色 ・焼成良好
8	甕 須恵器	-	- - -		内)ヘラナデ? 外)叩き目(平行)	・青灰色 ・焼成良好

第10表 溝状遺構出土石器観察表 (法量欄: 上段=長さ、中段=最大幅、下段=厚さ)

番号	分類	石質	法量	重さ	諸特徴	備考
10	石	鐵 黒曜石	(cm) (2.2) 1.5 0.4	(g) (0.9)	・有茎石鏨 ・両面調整により、丁寧な作出がなされ。断面はレンズ状を呈する。	・茎が欠損
11	石	鐵 黒曜石	(2.0) (1.6) 0.3	(0.7)	・凹基無茎石鏨 ・基部の抉りはあまり入らない。	・先端・両脚部が欠損
12	打製石斧	砂岩	7.1 4.7 0.9	40.0	・側縁部には両面に細かな剥離が認められ、横刃形石器と考えられるが、基部を刃部とする断面への後退が認められることから打製石斧として捕えた。	・表面に自然面を残す。
13	打製石斧	砂岩	(13.0) 9.9 2.0	150.0	・石鏨か?。 ・中央より上部は細身に形成され、柄の取り付け部を作出している。 ・刃部は幅広で片面のみに後退(剥離)が認められる。	・裏面に自然面を残す。 ・刃部・表面に欠損あり。
14	磨製石斧	綠泥岩	11.1 5.7 1.6	170.0	・剥離による成形後、下半部のみを丁寧に研ぎ磨いて、刃部を作出している。局部磨製石斧に属するものと見える。 ・頂部は敲打による磨滅がみられる。	・表面に自然面を残す。



第16図 潜状構造実測図



第17図 满状遺構出土遺物実測図

## 第V章 まとめ

箕輪町福与地籍は、地形・気候等格好的な自然条件に恵まれ古くは縄文時代草創期から人々が移り住み、それらの痕跡を示す数多くの貴重な遺跡が所在する町内においても重要な地域である。そして室町・戦国の世になると藤沢氏により福与城が築かれ、その頃に集落体形がほぼ確立し現在に至っていると言える。さて、福与地籍における埋蔵文化財の調査は、昭和52・53年度に大原遺跡、61年度に同じく大原遺跡群内上金遺跡が実施され、縄文時代早期・前期・中期・晚期、平安時代の各遺構・遺物が出土し、報告されている。しかしこれらは、扇状地ないし河岸段丘の末端に位置する遺跡であり、山裾の舌状台地に所在する遺跡については今回が初めてであった。今回出土した遺構・遺物から、縄文時代・古墳時代・室町～戦国時代・の各時代に及ぶ複合遺跡であることが判明した。それらについては前章にて詳細に記しているので、ここでは若干の考察を試み、今後の展望と課題を加えまとめとしたい。

### 縄文時代

当該時期に属する遺構は、住居址1軒（2号住居址）と土坑9基（1～9号土坑）で、出土した遺物から、いずれも縄文時代前期最終末に位置づけられよう。

住居址は、8基の土坑と重複していたが単独1軒のみの検出であったため、集落構成等の内容については不明と言わざるを得ない。しかし、多くの炭化材と焼土の出土した状況からして、火災住居として捕らえた。またそのためか、比較的まとまった遺物の出土がみられた。

出土土器としては、いわゆる晴ヶ峰・十三菩提式土器の諸特徴を示す土器が大半を占め、その他は炉址内より、羽状縄文を施す土器（第14図、12図14～16）と、これらの土器とは文様及び形態・胎土・色調・焼成等で大きな相違をみせる土器（第11図3）がみられる。特に後者については、大涌遺跡出土の第III群土器として分類された一群と類似性を持つものであり、北白川下層III式に比定することができよう。よって、これらが共伴するということは、当該期において西方文化圏と何らかの交流を示すものであり、今後の研究に大きな一助となるであろう。

土坑については、平面形・断面形等により大きく2つのタイプに分けられ、それぞれ用途にも違いがあるものと思われる。特に1号土坑を除く2～9号の土坑が2号住居址の内外に集中し、一つの土坑群を形成しているが、タイプ・覆土・切り合いなどから一概にも同一の内容を示すものとはいえない。また、住居址との切り合い状況から、かろうじて新旧がわかったが、出土土器の内容からあまり大きな時間差は認めることができず、住居址との関連性は不明と言わざるを得ない。

### 古墳時代

遺構は、住居址1軒（1号住居址）のみの検出であり、出土遺物から古墳時代前期に属する

ものと言えよう。

住居址の特徴として、4本の柱穴より壁にかけて外周するように粘土で堅い貼床が施され、内側は貼床の残骸と思われる？ロームブロックが多くみられるがいわゆる貼床はみられない。また炉址においても、炉の壁面に著しく火焼状況を示す「地床炉」と思われるが、壺の埋納により「埋甕炉」を作り変えを行なったものか、その他別の用途として炉そのものを転用したものかは判別できない。しかし、伊那市殿島城跡から本住居址と類似する貼床・炉址のあり方を示す検出例が認められてはいるが、町内では初めての検出であり、上伊那においても当該期に属する検出例が非常に少ないため、ここでの結論は見送りたいと思う。

尚、出土した土器は、いわゆる五領式と称される良好な一セット資料であり、S字口縁甕・台付甕を含む壺、鉢、高坏、器台による器種構成で、この中に壺がみられないのが大きな特徴である。また器台は存在するが小型丸底土器が伴なっていない。更に、弥生土器の系譜を受け継ぐ在地土器の様相はほとんど失い、外来系もしくは在地化しつつある外来系土器の一群と言えよう。中でも暗文状のヘラミガキを施す技法の高坏（第7図8・9）は、他にあまり類例をみないものであり、この高坏の位置づけが今後の上伊那地域における古墳時代文化研究に一つの視点を集めるであろう。近隣では、伊那市堂垣外遺跡の出土資料がこれに類似する。前述のとおり当該期の遺構・遺物の出土例が少ない上伊那では詳細な編年の確立がなされていないため、近年研究の進む下伊那地域の土器編年に当てはめるならば、恒川第VII期に比定できようか。いずれにせよ、大和政権の成立時における文化波及の通過点と目されていた箕輪町が、今回の結果によってその歴史の空白を埋めることとなったことは最も大きな成果であったと言える。

#### 室町～戦国時代

今回の調査では、更に舌状台地を遮断する様に直交する、堀切と考えられる中世城郭の一部が新たに発見された。調査範囲の限界もあってその規模や内容が明らかにされなかつたが、遺跡の所在する舌状台地自体が城郭そのものとしての性格を表わす可能性が暗示される。またほぼ時期的には併行する福与城址との関連性も含め、今後の課題となるであろう。

尚、今回の調査結果が今後の調査・研究と、郷土の歴史の究明に役立つことができれば幸いと存じます。末筆ではありますが、調査の進行に当たり深いご理解とご協力をいただきました福与区を始め、発掘調査関係者の方々に厚くお礼申し上げます

参考・引用文献（著者、発行機関名50音順）

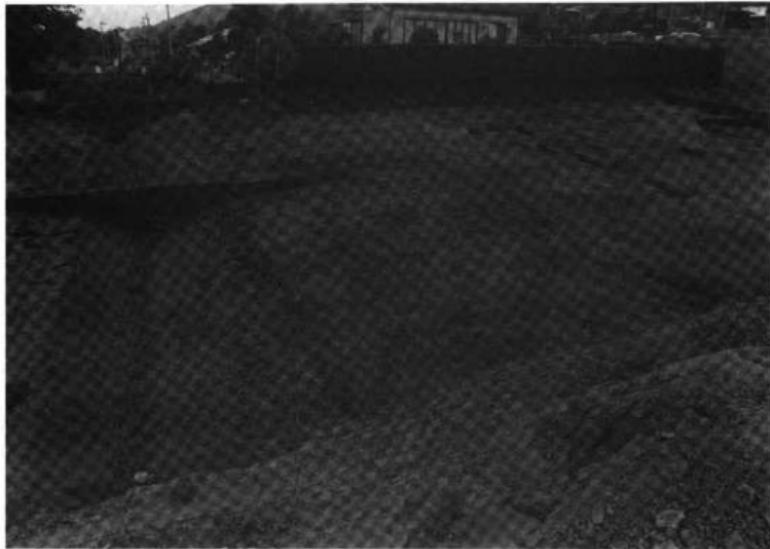
- |               |  |
|---------------|--|
| 飯田市教育委員会      | 1986 「恒川遺跡群」                               |
| 伊那市教育委員会他     | 1987 「殿島城跡・宮場間様十三塚遺跡」                      |
| 岡谷市教育委員会      | 1974 「扇平遺跡」                                |
| 杉原莊介・大塚初重     | 1971 土師式土器集成本編1 東京堂出版                      |
| 桐原 健・御子柴泰正    | 1969 「長野県伊那市美篠笠原堂垣外遺跡調査概報」『信濃』III 21-4     |
| 長野県教育委員会      | 1983 「長野県の中世城館跡－分布調査報告書－」                  |
| 長野県教育委員会      | 1973 「南高根・北高根A遺跡」県中央道埋文調査報告書 南箕輪村<br>その1、2 |
| 財長野県埋蔵文化財センター | 1987 「第4節 大洞遺跡」中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査<br>報告書   |
| 長野県史刊行会       | 1981 長野県史 考古資料編 全1巻(1)遺跡地名表                |
| 長野県史刊行会       | 1983 長野県史 考古資料編 全1巻(3)中・南信版                |
| 長野県史刊行会       | 1988 長野県史 考古資料編 全1巻(4)遺構・遺物                |
| 西ヶ谷恭弘         | 1988 城郭 日本史小百科24 近藤出版者                     |
| 三上徹也          | 1987 「梨久保式土器 再考」長野県埋蔵文化財センター紀要1            |
| 村田修三          | 1987 中世城郭辞典 新人物往来社                         |
| 箕輪町教育委員会      | 1977 「大原第一遺跡」                              |
| 箕輪町教育委員会      | 1978 「大原第二・三遺跡」                            |
| 箕輪町教育委員会      | 1979 「御射山遺跡」                               |
| 箕輪町教育委員会      | 1980 「御射山第二遺跡」                             |
| 箕輪町教育委員会      | 1980 「澄心寺下遺跡」                              |
| 箕輪町教育委員会      | 1986 「上金遺跡」                                |
| 箕輪町誌編纂刊行委員会   | 1976 箕輪町誌 第1巻 自然・現代編                       |
| 箕輪町誌編纂刊行委員会   | 1986 箕輪町誌 第2巻 歴史編                          |
| 八木光則          | 1976 「いわゆる『特殊磨石』について」『信濃』III 28-4          |



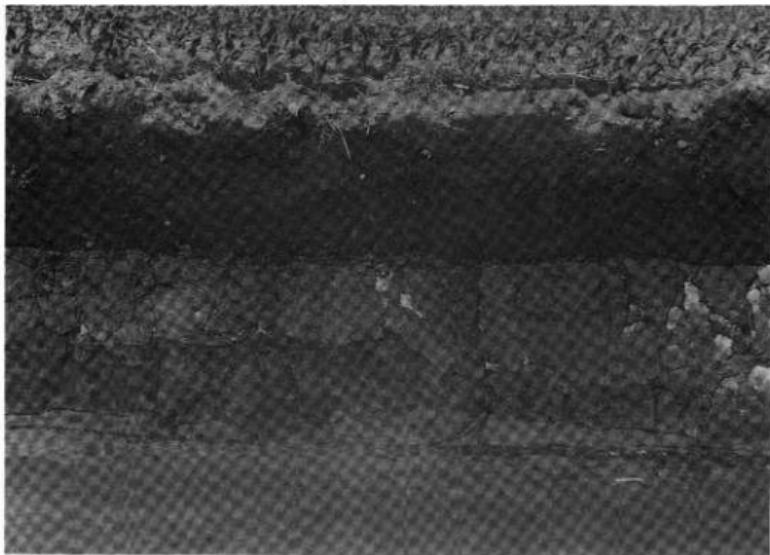
調査地遠景（南東より）



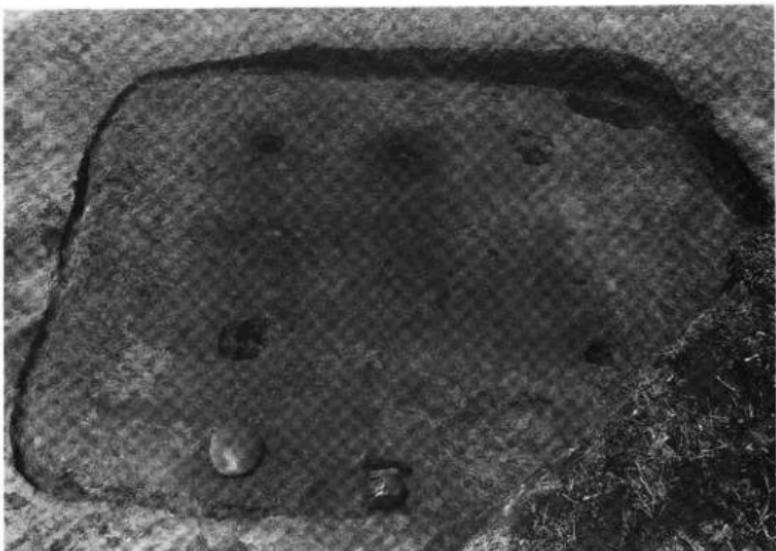
調査地近景（南方より）



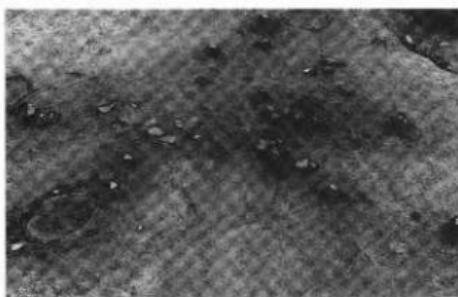
調査地全景（南方より）



土層断面

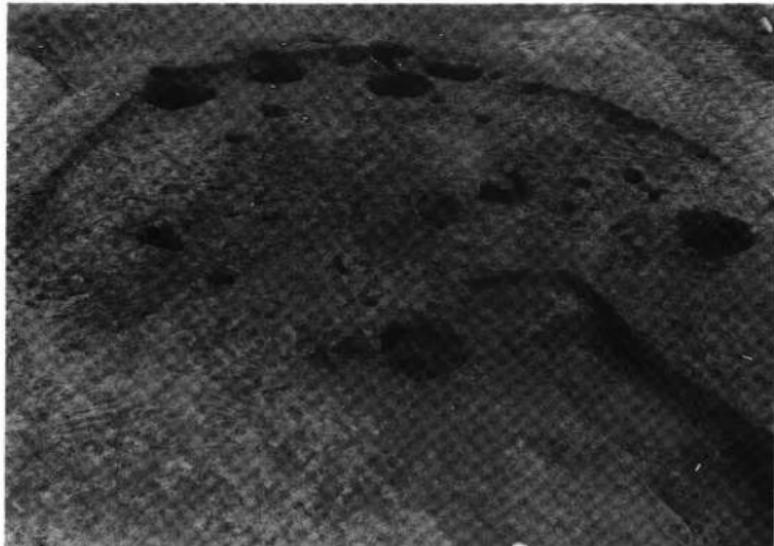


1号住居址

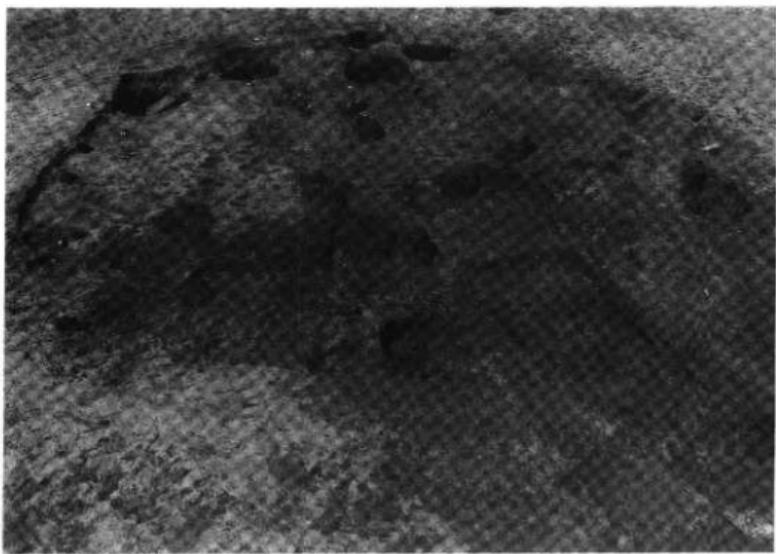


1号住居址遺物出土狀況



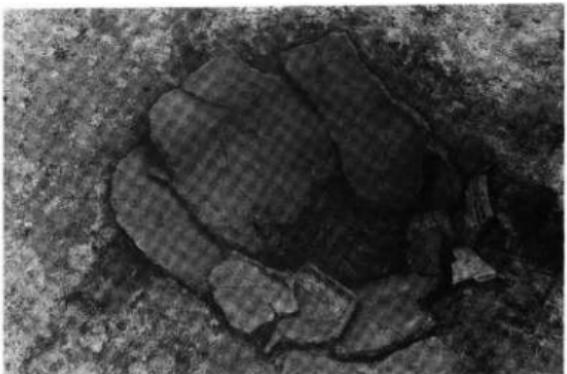


2号住居址

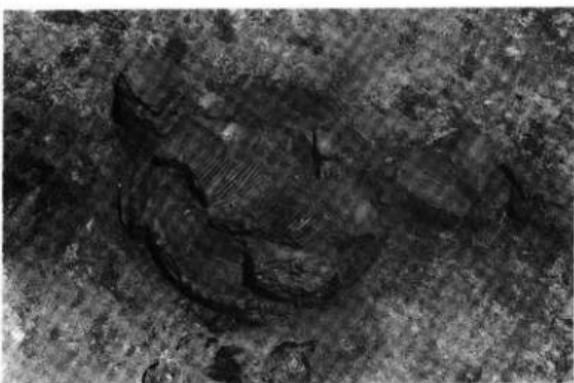


2号住居址遺物出土状况

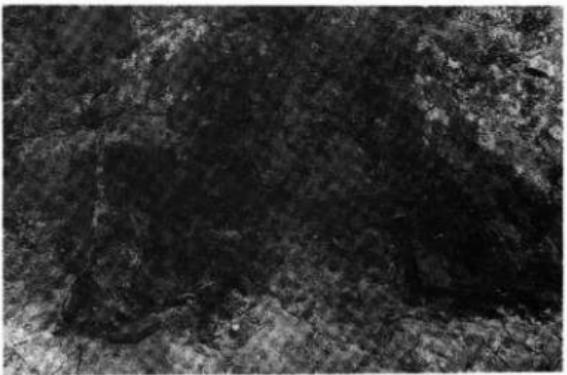
2号住居址炉

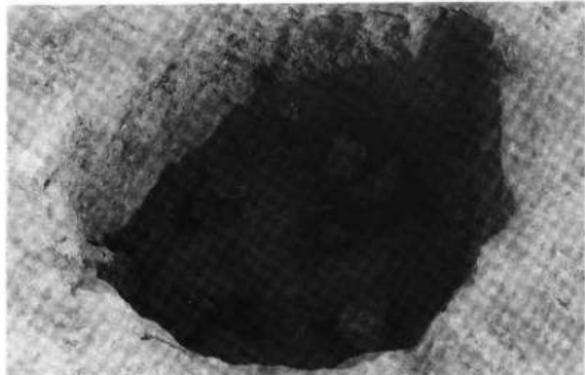


2号住居址  
遗物出土状况



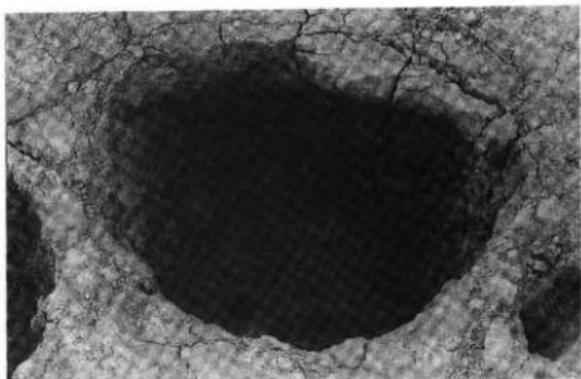
2号住居址  
炭化物出土状况



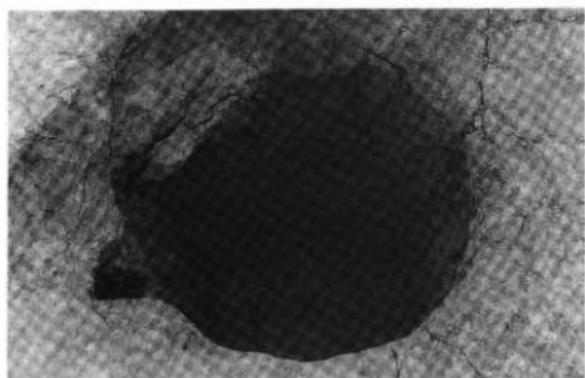


1号土坑

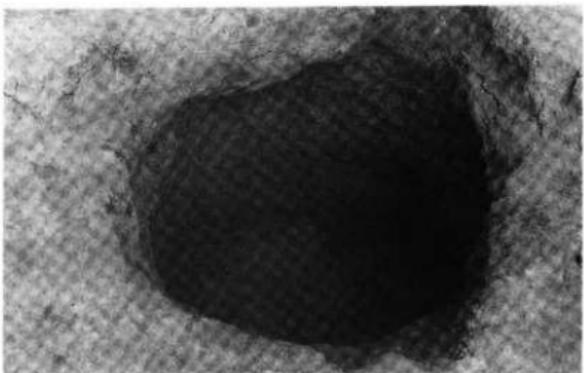
2号土坑



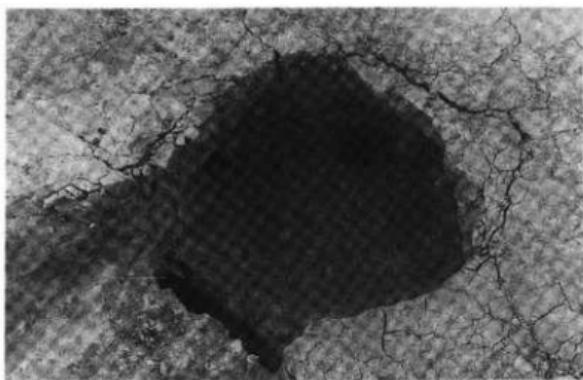
3号土坑



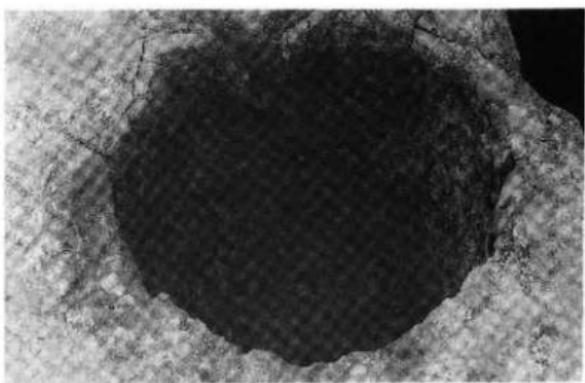
4号土坑



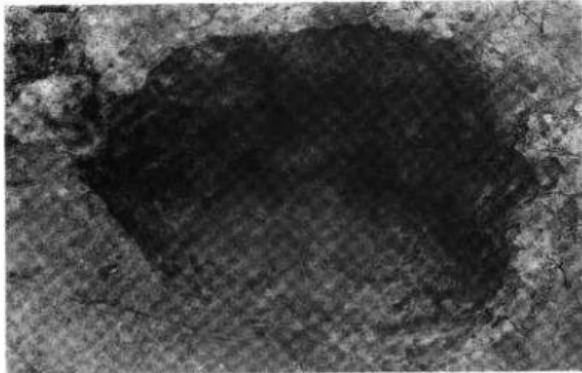
5号土坑



6号土坑

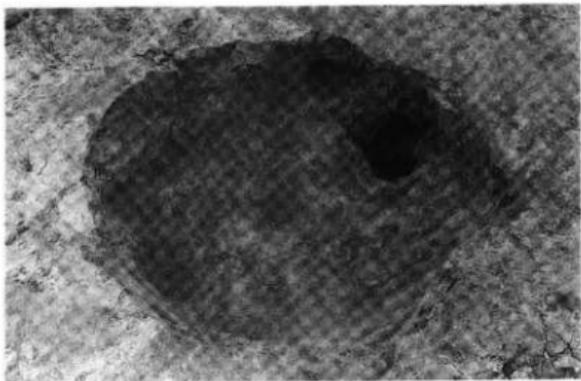


图版  
8



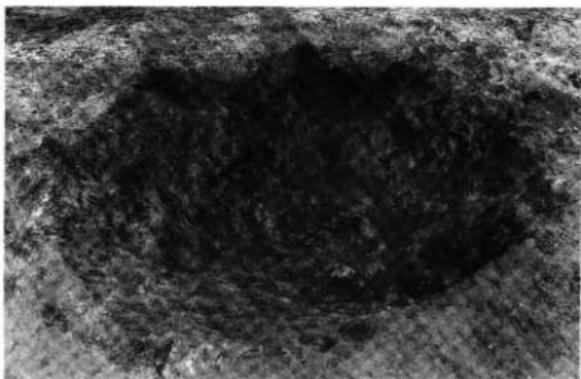
7号土坑

8号土坑

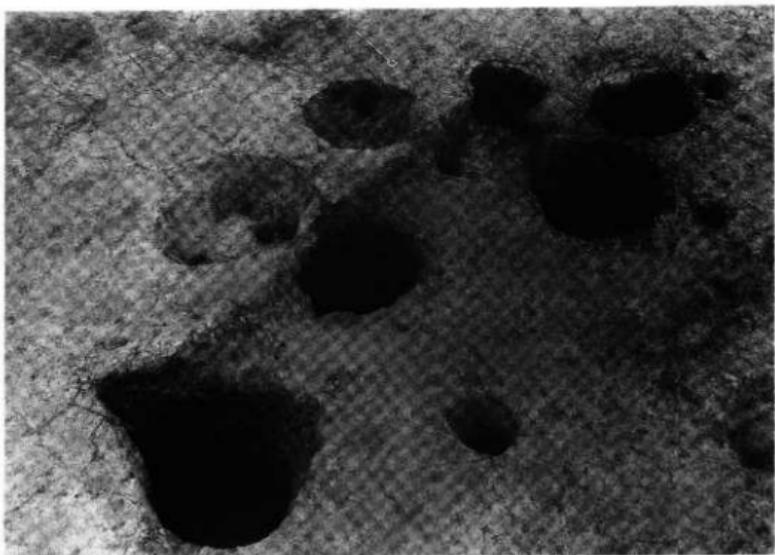


9号土坑





10号土坑



2号居住址周边土坑群



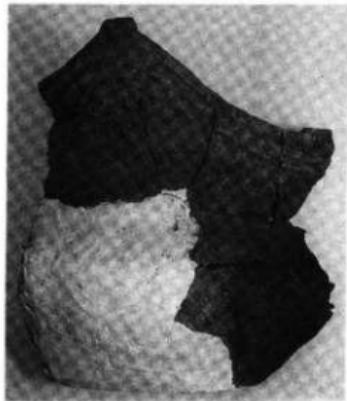
溝状遺構



溝状遺構土層断面



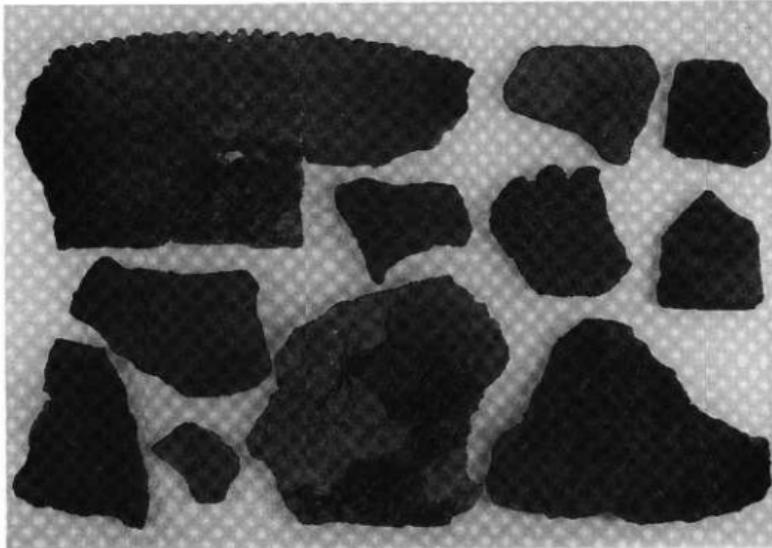
1号住居址出土土器



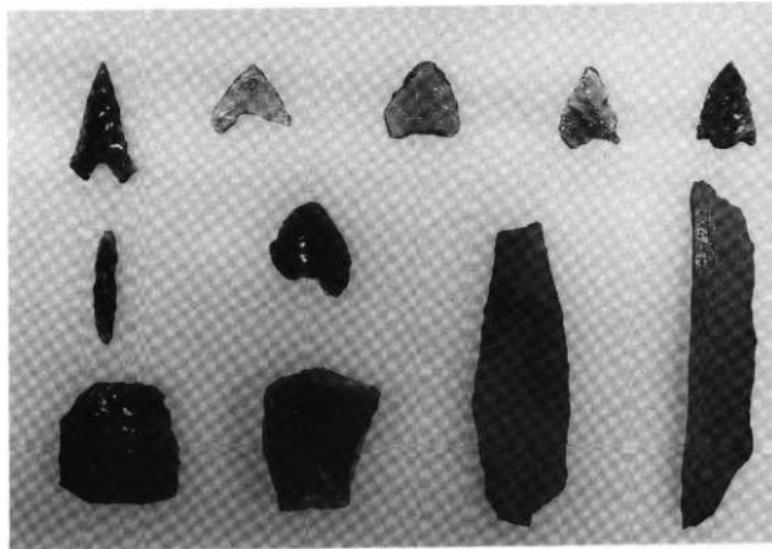
2號住居址出土土器 1



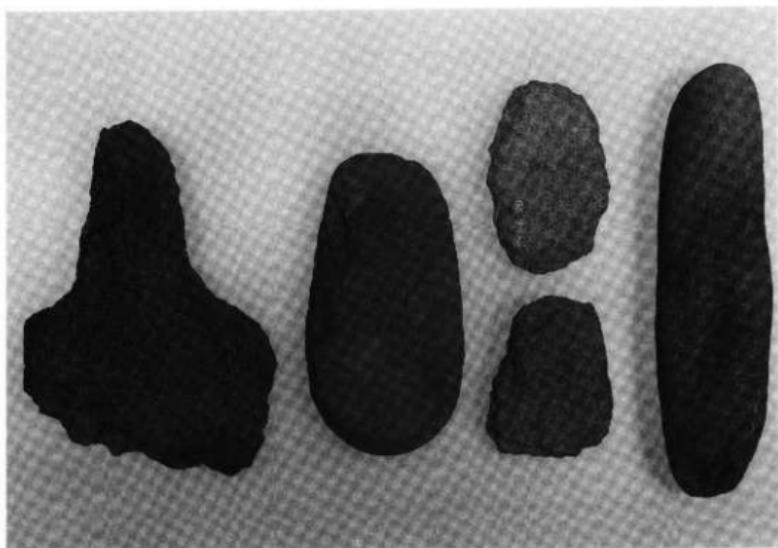
2号住居址出土土器 2



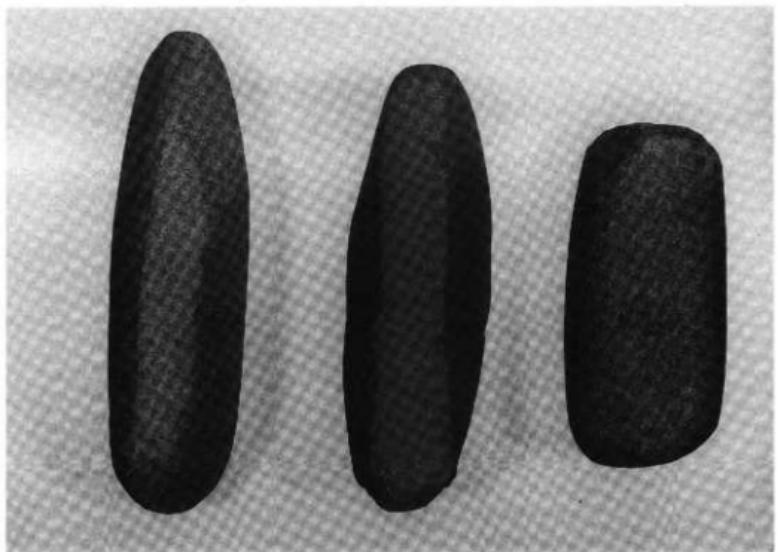
土坑出土土器



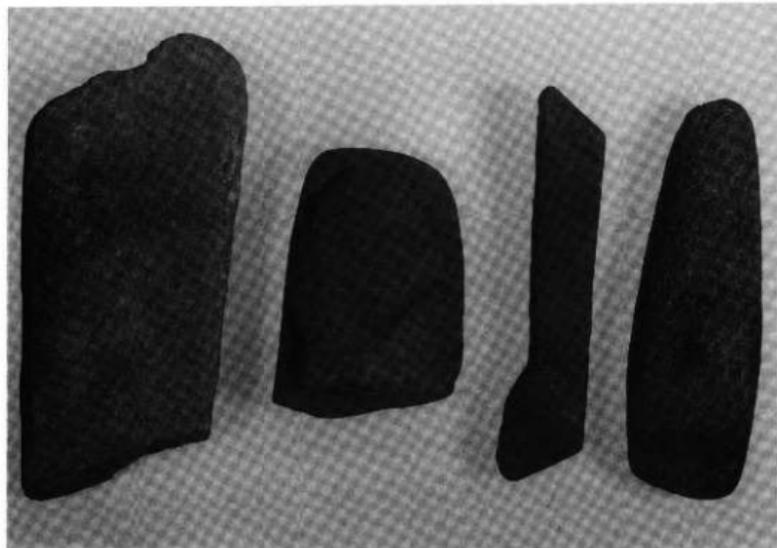
2号住居址、溝状造構出土石器



2号住居址、溝状遺構出土石器



2号住居址、土坑出土石器



1号住居址出土石器



調査団員

## 郷沢遺跡

上伊那圏域広域的水道整備計画  
箕輪町上水道福与配水池建設に伴う  
郷沢遺跡の緊急発掘調査報告書

1992年3月30日 印刷

1992年3月30日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会  
印刷所 伊那市 横小松総合印刷所